

諸注意

- ・ 本書は艦隊これくしょんの二次創作です。二次的著作物としての著作権は著者が保有します。
- ・ 別途許諾なき転載、複製、アップロードなどについては日本国著作権法に基づく損害賠償の対象となる場合があります。
- ・ 本書はフィクションです。内容は作者の妄想であり、実在の人物、団体ないし集団、または歴史上の事件との関係はありません。また、作者は本書を通じて特定のいかなる個人、思想、集団を批判する意図を持ちません。
- ・ 本書は 2022 年 2 月 23 日以前に構想されたものです。

登場人物

ウィラード・ギブズ……………アメリカ海軍 SEAL 将校。中佐
ジェイク・ガットマン……………CIA 分析官。退役海兵隊大尉
パーヴェル・ポリシコ……………ソ連海軍 GRU 将校。一等海佐
ガズ・アンダーセン……………英国情報部工作員。元英国軍
カイル・ラザラス……………フォトジャーナリスト
キリール・ラズーモフ……………KGB 工作員
ゾーヤ・ラズーモワ……………キリールの娘
エイミー・フォスター……………ランド研究所戦略部門アナリスト
瑞鶴……………艦娘
ヴェールヌイ……………〃
サン・ホアキン・カウンティ…〃
ガンビア・ベイ……………〃
ジョンストン……………〃
サミュエル・B・ロバーツ……〃
イントレピッド……………〃
ホーネット……………〃
赤城……………〃
加賀……………〃

目次

プロローグ	7
アイスバウンド	11
ゴースト・オブ・ウオー	20
サルヴェイジョン・ネイヴィー	103
デイズトリクト・ゼロ	169
ゴースト・イン・ザ・ハル	216
年表	257
あとがき・奥付	258

D
O
O
M
S
D
A
Y

G
I
R
L

―伊耶那美の命のりたまはく、

「愛しき我が汝兄の命、かくしたまはば、汝の國の人草、一日に千頭絞り殺さむ
とのりたまひき。」

ここに伊耶那岐の命、詔りたまはく、

「愛しき我が汝妹の命、汝然したまはば、吾は一日に千五百の産屋を立てむ
とのりたまひき。」

ここを以ちて一日にかならず千人死に、一日にかならず千五百人なも生まるる。―

プロローグ

2013年4月23日 日本国神奈川県 横須賀日米共同区域

「……本日、横須賀基地で日米合同の……」

バックバーにかけられた液晶テレビでは、ブルーベリーの迷彩服を着た女性兵曹がマイクを片手に喋っていた。カウンターで白髪の老人がちびちびとオリーブもオニオンも入っていないウオッカ・マティーニを飲んでる以外は客の姿もない。バーテンダーは無言のままグラスを磨いていて、店内にはアメリカ軍放送のニュース番組以外、喋る声はなかった。

「いらっしやい」

ドアベルが鳴った。入ってきた背広姿の男は、バーテンダーに目礼するとカウンターで飲んでる老人の隣に座った。

「式典、出なかったんですか」

「生きている間に自分の名前が海軍のフネに付けられるほど悪いことをした覚えはないぞ。あのロナルド・くそつ……
…レーガンじゃあるまいし」

老人は悪態をつこうとして、すんでのところで収めた。パーの壁には、横須賀を母港とする艦艇のクレストがところ狭しと並んでいた。ロナルド・レーガンのクレストもそこにはあった。生き残った艦隊がアメリカ本国の基地から次々と移駐してくるなか、クレストは増え続けていた。

「それに俺は休暇中だ」

肩をすくめて、老人は空になったグラスを振った。午後の三時を過ぎたばかりで、生中継の映像に映っている外は明るかった。

「同じものを？」

「いや」

「すみません。こちらにカミカゼをオンザロックで。僕にはビール」

流暢な日本語で注文を済ませると、背広の男はTVを見上げた。レポーターは巨大な空母を背景に浮かぶ、真新しい艦を紹介していた。

「……この最新鋭支援艦はアメリカ海軍艦艇としては初めて日米合同で……」

「お前こそ、仕事はいいのか」

「今はこれが仕事です」

老人にカクテル、背広の男にハートランドのジョッキが運ばれると、二人はグラスを軽く合わせた。老人は息子と久しぶりに会う偏屈な父親のように顔を背けていたが、口元はわずかに和んでいた。背広の男は眼鏡越しに老人の変わらない様子を眺めながら、笑顔でビールをすすった。

「経験豊富な提督をスカウトする大事な仕事です」

「次期中央情報長官などが直々に出てくることはないだろう」

「現場に出ないとわからないこともあるんですよ」

T Vの画面が切り替わり、レンガ造りの庁舎が映し出された。日米両海軍の要人や政治家が居並ぶ中、壇上ではどうして自分がここにいるんだろうと言わんばかりにセーラー服を着た中学生くらいの少女があたふたと冷や汗をかいていた。

「ほ、本日はお日柄もよく……」

壇上の少女が言いかけた瞬間、風が吹いて制服のスカートがめくれた。白い何かが映ったかと思った瞬間画面が暗転し、画面が復旧した時には凍り付いた表情のレポーターだけが映っていた。

「あれがここの初期艦か。ずいぶんとサービスがいいじゃないか」

年齢を経たもの特有の遠慮のなさでカラカラと笑う老人を、背広の男は冷やかな目で呆れたように眺めていた。

「ほんとそういうところですよ、提督」

「いやいや。縁起がいい。気に入ったよ」

老人は陽気に酒を呷ると、干したグラスを掲げた。

「横須賀鎮守府に」

仏頂面をしていた背広の男も相好を崩し、まだ半分ほど残ったジョッキを老人のグラスに合わせた。

「横須賀鎮守府に」

「……いよいよだな」

「はい」

老人はグラスをカウンターに置き、ようやく元の進行に戻った式典をじっと見ていた。先ほどまでの女子中学生のパンツで大笑いする飲んだくれの顔は消え、冷徹だが温かみを含んだ職業軍人の目が画面に映る少女を睨んでいた。

「サービス任務開始だ」

アイスバウンド

197 ■年 ■月 ■日 ノルウェー海 ソビエト連邦流水基地「ロ・8

「……開けゴマ、だ」

起爆装置をクリックする。爆発、というには控えめな振動が崩れかけた建物を震わせ、冬の間にも固まった雪のかけらが屋根の端から滑り落ちた。

「ビビったか？」

「……中身まで吹き飛ばすなよ」

「そんなヘマするかよ」

鼻白んだ風に肩をすくめてみせると、男は書類ロッカーからねじれた扉を引きはがした。吹き飛ばすわけではない。爆薬を使って焼き切る、それだけだ。昨日今日C4爆薬をこねくり回し始めたわけではないのだ。

陸軍工兵隊を退役してからこのかた、税務署に知られることのない手当を目当てにCIAの仕事は何度か請け負って

きたが、今回の任務はどこか虫の好かないところがあった。

その要素の一つ、不愛想な相棒は、スコープのついたドイツ製のライフルを低く構えて窓際から間断なく外を見張っている。ジェスター1とジェスター2。そのとつてつけたようなコールサインがいまの二人の名前だった。おたがいに本名は知らされていない。爆破と通信担当がジェスター2。チームの指揮官がジェスター1。HALO降下経験のある潜入任務のスペシャリストということでこいつと組まされたが、どうにもウマが合わない感じが拭い切れない。もう少し愛想よくしても罰は当たらないだろうに。

「ホッキョクグマでも襲ってくるってのかよ」

自分のジョークに鼻先で笑ってみせながら、ジェスター2はロツカーの中に押し込まれていた一切合切を防水袋の中に押し込んでいく。手袋の中でかじかんだ指に血行が戻り始め、チクチクと刺すような感じがした。相棒の方は手伝う気はないらしい。

「当たり前だ」

通信記録、日誌、隊員の評価記録。タイプされているものもあれば、読みにくい筆記体の手書きのものもある。ロシア語の書類を手当たり次第に袋に詰め込んでいく。大当たりとは言えない古いものばかりだが、本部の分析班に回せばまだ役には立つだろう。北極圏の刺すような冷気の中をパラシュートに吊るされて、ぶかぶか浮かぶ流水の上に乗せ

来た甲斐があることを祈るばかりだ。

「……急げ」

「どうした？」

「撤収する」

書類を漁る男の背後で、ジェスター1は言葉少なに、しかしはつきりと呟いた。ジェスター2は背後を振り返らないまま、左右に首を振る。このチームの指揮官はこいつだ。決定権は向こうにある。撤収するといえば撤収だ。

「迎えが来るまで数分かかるぞ」

「準備しろ」

防水袋のふたを閉じると、ジェスター2は肩に括り付けていた無線機の操作パッドに手を伸ばす。回収要請のコードを送ると、間髪入れずに受領通知と回収機の到着予定時刻が送り返されてきた。20マイル彼方で流水を遠巻きに周回している〈気象観測機〉が、数分のうちに飛んでくるはずだ。男は書類と無線機の詰め込まれた防水袋を床の上に放り出すと、ようやく同行者の方を見た。

「五分後に到着する。何があった？」

建物全体は北極圏の風雪にさらされて半ば崩れかかっていたが、二人の居る部屋は、まだ屋根も壁も残っていた。埃

の浮いた窓枠の向こうに広がる、白い氷と深緑色の海は穏やかで、天候が変化する気配もない。餌場を求める合間に羽を休める海鳥の群れが、雪に浮かんだそばかすのように点々と黒い影を作っていた。

「マジでホッキョクグマでも襲ってきたってのかよ？」

「潜水艦だ」

「潜水艦？」

ペンギンの群れでもやって来た、と言われた方がまだ信じられる。男は一瞬、同行者が冗談でも言っているのかといぶかったが、白いフェイスマスクの向こうの表情は読み取れない。

「ソ連のか？」

「……いや」

同行者は白いテープがぐるぐると巻かれたライフルを構え直し、窓の外に向けた。安全装置を外すかちりという音が、静かな室内に反響する。

「連中が監視していたものだ」

「……？ まさか……」

地面が、揺れた。

「マジかよ！」

轟音とともに、北極海の海水に頼りなく浮いていた流水が揺らぐ。寝ていた犬を蹴っ飛ばしたようなけたたましい金切り声を上げて、虚を突かれた海鳥がいずこへかと飛び去って行く。崩れかけた基地の中で最後まで持ちこたえていた屋根材が、ばらばらと埃を立ててそこかしこで崩れ落ちていた。

「くそッ……！！ ヤツら……なのか？」

「おそろくな」

慌てたそぶりもなく、男はライフルの台尻で窓を割ると、銃身が突き出さないように円を描いて位置を変えながら、衝撃の来た方向をスコープ越しに窺った。深緑色の海に浮かび上がった、乳白色の航跡。立ち上がった水柱が跳ね散らかした水しぶきが、積もった雪の上に点々と後を残している。ここからではそれ以上は見えない。ライフルを下ろして窓際を離れると、男は戦利品の袋を引きずるようにして運ぶ相棒の肩を叩いた。

「フルトン回収の準備をしろ。離脱する」

「言われなくてもスタコラサッサだよ」

二人は縦隊を作って所長室を出た。ライフルを構えたジェスター1が前方を警戒しながら先導し、防水袋を抱えたジェスター2が続く。棟の中央、食堂か何かの共用スペースになっている一番大きな部屋は半ば崩れ、フルトン装置を

おいてある雪原にそのまま出ることができる。

「クソッ」

再び、足元の氷塊が揺れる。めりめりと不快な、背筋を凍り付かせるような音。この基地は海の上を漂流する氷塊の上に乗っているだけだ。流水が崩れれば、その下は北極圏の冷え切った海水が待っている。雪原に屈みこむようにしてジェスター2があわただしくフルトン回収装置の箱を開けていると、その傍らでジェスター1はライフルを構え、立射姿勢をとった。

「ッ……」

銃声。熱い葉莢が雪の上に転がり落ち、じゅっと湯気を立てる。何を撃っているのか。何が見えているのか。敵は本当に存在するのか、ジェスター1が突如発狂しただけではないのか。遠雷のような轟音とともに、よって立つ地面が揺れていなければそんな疑いも持っただろう。しかし今は、ここを一刻も早く脱出するしかない。

「防護服を着ている暇はない。そのままハーネスにラインをつなげ」

「ああ……」

ジェスター1がライフルの照準線に目を向けたまま指示を出す。ジェスター2が震える手でフルトン気球のラインを二人のハーネスと防水袋につなぎ終わった瞬間、音声で通信が入った。

〈アイスバードよりジェスター、送れ〉

「こちらジェスター2。ジェスター1が交戦中。速やかに回収されたし。送れ」

〈ジェスター2、もうすぐこちらから視界内に入る。交戦中とはどういうことか。対象は何者か〉
ぐわん、と足元が揺れ、ジェスター2とジェスター1の間を裂くように、氷塊に亀裂が入った。

「早くしろ！」

虫の羽音を思わせる、ターボプロップの音が入る。澄んだ北極海の青空を背に、機首にヒゲのような回収アームをつけたC・130の機影が徐々に高度を落としながら近づいてくる。数百ノットで接近してきているはずだが、徐々に大きくなってくるその巨体がいかにもどかさかった。ジェスター2は水素ガスの詰まった気球を空中に解き放つと、揺れる氷塊の上で立膝を突き、拳銃を抜いた。

「どこだ？ 何処にいたんだ？」

45口径のガバメント・モデル。拳銃が役に立つのか？ そもそも、一体何が起きているのか？ ふわふわと、どこか場違いに浮かび上がっていくオレンジの風船を横目に睨みながら、安全装置を外す。ジェスター1はライフル射撃競技でもしているかのように、一定のペースを保って撃ち続けていた。その照準線の先を見ても、何も無い。いや、何かバツバツと赤く光った。アイスキャンディを思わせる、明るいオレンジ色の炎がずっと海面上から放物線を描いて伸

び……そして二人の頭上を追い越して、崩れかけた流水基地に吸い込まれていく。次の瞬間、轟音とともに崩れかけたバラックがはじけ飛んだ。

「畜生ッ！」

その光景はベトナムで何度も見た。まぎれもなく、誰かがロケット弾で砲撃している。吹き飛ばされたガラスと木の破片が、分厚いアノラックの上から叩きつける。ジェスター2は、姿も見えないまま、砲撃が来た方角へ拳銃を撃ち返す。弾倉の弾が空になり、スライドが開放状態で固定される。その瞬間、何かがぐっとハーネスを引っ張り上げた。

C130の後部ランプから、遠ざかる流水基地が見えていた。二つに割れた氷塊の狭間に、焼け落ちる流水基地の残骸が呑み込まれ……やがて水柱を立てて消えた。

「あなたには……」

機上作業員が忙しく立ち働くなか、ジェスター2は簡易座席の背中にもたれて息をついた。防護服なしで空中に釣りあげられ、体は凍えそうに冷え切っていたのに、額には汗がにじんでいた。

「見えるのか」

「……見えるんじゃない。感じるんだ」

油圧が作動して、ゆっくりと後部ランプ扉が締まる。機内に吹き込む風とエンジンの音が弱まると、ジェスター1は2の隣に腰を下ろした。

「艦娘^{カシムス}を」

ゴースト・オブ・ウオー

1

1985年 10月8日 シリア・タルトゥース沖 地中海公海上「アキレ・ラウロ」号 ラウンジ

「ヤーコフ・グートマン」

ジェイクのバスポートを改めていた男は、記載された姓名をわざとイディッシュ風の発音で読み上げた。

「ユダヤ人だな」

「違う」

男の顔を直視しないようにして、ジェイクは答えた。

「アメリカ人だ」

「違う！ お前はユダヤ人だ！ イスラエルのスパイだ」

激昂する男を刺激しないように、ジェイクは視線を逸らす。イスラエルのために働いているというのは男のどまかせだが、もう半分は真実と言えなくもなかった。気づかれるわけにはいかない。

「立つ」

男が自動小銃の銃口を突きつけ、立ち上がるように促す。船の乗客乗員がすべて集められたラウンジには、人いざれとガソリンの匂いが充満していた。船が占拠されてから一日半。自動小銃と手榴弾で武装した、アラブ訛りの英語を話す男たちは、間断なく人質を見張っていた。

疲労困憊し、何も知らないふうを装え。対尋問訓練でそう教えられた気がする。装うまでもなかった。食事も睡眠も足りていない。テロリストにせかされるまま、のろのろともう一人名前を読み上げられた乗客、車いすに乗った初老の男性の傍らに立つ。

「そいつを押してやれ」

「待って！」

座り込んでいた人質の中から、同じく初老の女性が一人飛び出すように進み出て、車いすの男性の傍らにすがる。夫婦だろうか、とジェイクは推測した。

「どこに連れていくの……？」

「邪魔をするな」

テロリストは、追いつがる女性を手を持った銃のストックで押しつけるように振り払うと、ジェイクに車いすを押しよう命じた。

「医務室に連れていくだけだ。具合がよくないようだからな」

午後三時。傾きかけた秋の太陽が、柔らかくサンデツキに差し込んでいた。海は穏やかに凪いでいた。予定通りにスエズ運河を眺められていたら、どんなに穏やかな後悔だっただろう。イタリアで走り回った後、自分へのねぎらいとして、あるいは個人的な興味を満足させるため、申し込んだ地中海クルーズ。今更後悔しても何にもならないが、どうしてこうなったのか、という後味の悪さが澱のように胸に沈んでいく。

「……あんた……」

初老の男性は、ジェイクが車いすを押すあいだ、申し訳なきさそうにもごもごつぶやいていた。

「すまん、心臓の具合が……」

「いいんですよ、大丈夫です」

努めて平静を装いながら、後ろをついてくる二人のテロリストに聞こえないように、ジェイクは男性の耳元に屈みこ

むようにして答える。

「すぐに解放されます」

「ああ……」

具合が悪い、というのは本当のようだった。冷や汗の浮かんだこめかみに、半ば白くなった髪が苦しそうに張り付いている。人質として拘束される、というのは常人にとっても耐え難いストレスだ。ましてや病人には。

「違う、こっちだ」

車いすを医務室の方向に向けようとしたジェイクを、背後にびったりとついていたテロリストが制する。指し示しているのは船尾の方角だった。

「だが、医務室は……」

「いいからこっちだ」

さっと血の気が引く。彼らは、嘘をついた。この老人の妻に嘘をつく必要があった。想像ではない。彼らは交渉が進まないことにいらだち、見せしめに人質を殺そうとしている。職業柄、事実と想像は区別するよう訓練されているが、これは蓋然性の高い推定だ。考える。考えて、行動しなければならぬ。適切な行動をとらなければ、自分とこの老人は殺される。どうする？

「妙な気を起こすなよ」

ジェイクの思考を読んだかのように、テロリストの一人がジェイクに見せつけるように手榴弾を取り出し、ピンを抜いた。

「俺がレバーを握っている間は安全だ。だが手を離せばドーン！ みんなお陀仏だ」

「俺たちは死を恐れていない。覚えておけ」

手榴弾の構造は知っている。彼らのいうことは正しい。どうする？ どうすればいい？ 考えがまとまらないまま、船尾デッキは一步また一步と近づいてくる。二人のテロリスト。ジェイクの観察する限り、手際が良くはない。十分な訓練も受けていない。しかし、彼らの持っている武器は脅威だ。彼らが知らない事実。ジェイク・ガットマンはアメリカの政府職員で、退役したとはいえ海兵隊員であるということ。戦う、という選択肢が思い浮かぶ。だがだが、どうやって？ 無情にも、ジェイクがのろろと進めた歩みは船尾の展望デッキへとたどり着く。

木々の緑と白い岩がまだらになった、シリアの海岸線が見えた。秋の柔らかな日差しの中、遠く白亜の家々が港の向こうに見える……普段ならせわしなく港を出入りしている民間船も、基地に停泊しているソ連の艦船も、静まり返ったように動こうとしない。沖合に停泊したアキレ・ラウロを遠巻きにして、町全体がかたずをのんで見守っているかのような気がした。

「そいつを海に突き落とせ」

銃を持っていた男の方が、デッキのふちにある柵の鎖を外した。

「何だって？」

「その老人を海に突き落とせ、と言った」

ジェイクは老人と顔を見合わせた。乗降ゲートを架けるための、柵にあいた隙間。ジェイクが押している車いすと、静まり返った地中海の水面とを隔てるものは何もない。老人が、無言のまま喉を震わせ、目で訴えかける。そんなことはしないだろう？ と。

「そんなことはできない」

「やれ。それともお前が先か？」

ジェイクの顔面に銃を向けながら、男がうそぶく。

「早いか遅いかの違いだ。アメリカ人」

「そんなことをしたらこの人は――」

死んでしまう、と言いかけた瞬間、銃声が耳を貫いた。マズルフラッシュが、とっさに目を閉じた。ジェイクの顔の上から網膜を焼く。葉莢が木のデッキに転がる固い音。硝煙の甘ったるい匂い。ジェイクはまだ生きている。ぎゅっと閉

じた目を開けると、車いすの上の体はだらりと力なく傾いていた。

「チッ」

銃を持った男は、短く舌打ちして車いすの背を蹴った。老人の体と、アルミの車いすはもつれるように、耳障りな音を立てて船体にぶつかりながら転がり落ち、最後に小さな水音を立てた。

「次はお前だ」

救えなかった。目の前で、同じ国の人間が殺された。その事実がじくじくと胃の奥を苛み、吐き気がこみ上げる。

「選ばせてやる。自分で飛び込むか、撃たれてから放り込まれるか」

デッキに立ち尽くすジェイクを、テロリストは銃のストックで突くようにして、無慈悲に船べりへと押しやる。銃を奪うことができれば、いや、手榴弾を持った男がいる。少し離れて、銃を持った仲間とジェイクを見守っている。同時に二人を無力化しなければならぬ。できるだろうか。それとも、地中海を泳ぎ渡ってシリアまでたどり着くか、途中で誰かに救助される方に賭けるか。

「飛び込め」

「……？」

誰かが足元から囁いた。ストレスからくる幻聴……ではない。静かだが、はっきりと聞こえた。アメリカ人の英語だ。

冷や汗が目に入ってしまったのを感じながら、テロリストに気取られないように、ゆっくりと足元に目を凝らす。

「……！」

いつからそこにいたのか。血の跡が点々と浮いた船体にへばりつくようにして、黒いマスクを付けた男が身を潜めていた。潜水服の上からダークグリーンのパイロットスーツを着こみ、両生類か何かのように、船体の壁面に張り付いている。顔は潜水マスクで見えないが、胸に抱えている装置には見覚えがあった。ドレーガーの閉回路呼吸装置。海軍の戦闘スイマーが用いるものだ。海軍？ 助けに来た？

カートゥーンのニンジャめいて身を潜めた男はそれきり無言のまま、親指で背後の水面を指し示すと、混乱するジェイクに向けて指を三本立てた。三つ数えたら海に飛び込め、という意味だろうか。もし違ったら？ その時は、その時だ。

三。銃を持っていた男が、ジェイクの様子を不審がって、その傍らへと歩み寄る。

二。ぶすぶす、と乾いた音とともに、男の眉間に赤い穴が開く。

一。身を潜めていたスイマーがデッキに上半身を乗り出し、消音器のついた拳銃で狙いたがわずもう一人の持っていた手榴弾を撃ち抜く。

弾き飛ばされた手榴弾が炸裂する寸前、ジェイクは空中に身を躍らせた。

「ぶっ……ぐがっ！」

水面に落下するときの姿勢はどうするんだったか？ 足を交差させ、なるべく体がまっすぐになるようにする。思い出した時には、からだが生ぬるい海水に叩きつけられていた。まるでコンクリートの上に突き落とされたように感じる。落下の衝撃で眼鏡が外れた。とっさに手を伸ばそうとするが、無慈悲に手をすり抜けて水底へと沈んでいく。海水が目染みた。

漸くのことで水面に浮きあがったジェイクの周りに、バラバラと何か固いものが降りかかる。手榴弾の破片だろう。

船は？ あの潜水服の男は？ 手足を交互に使って頭を水面から出しながら、今飛び降りたばかりの船尾を仰ぎ見る。ぼやけた視界の半分ほどを、黒く塗られた船体が覆いつくす。2万トンの「アキレ・ラウロ」は、水面から仰ぎ見るといかにも巨大に映った。

「……？」

ジェイクは、笑うような子供の声を聴いた。見回しても、声の主はいない。水面に浮かんでいるのはジェイク一人。今度こそ聞き違いだろうか、とかぶりを振った瞬間。

「さあ、やっちゃおっか」

今度ははっきりと聞こえた。女の子の声だ。笑うように朗らかで、どこか背筋を冷たくさせる声。海の上で、そんな

声が聞こえるはずはないのに。いや、何か見える。声がした方、黒い海面が白く泡立っている。水面下で泡立つなにかは、勢いを増してどんどんジェイクのほうに近づいてきて——その傍らを通り過ぎると、一直線にアキレ・ラウロの船腹に吸い込まれていった。それはまるで、映画か何かで見た……

「魚雷？」

アキレ・ラウロのどてっばらに吸い込まれた「それ」は、盛大な水柱を立てた。水中を伝わる衝撃波が、次いで轟音が、ジェイクの脳を揺らす。そのさまは、まさにジェイクが昔映画で見た、潜水艦に攻撃されて沈んでいく船そのものの光景だった。

呆然と見つめるジェイクの視線の先、アキレ・ラウロは夕日を浴びながら、ゆっくりと傾き始めていた。

1985年11月27日 アメリカ合衆国ワイオミング州 ボイル郡・カスター郡郡境付近 国道26号線

「もしもし……母さん？」

二十五セント硬貨がガシャリと音を立てて電話機に飲み込まれる。

「ああ……うん。俺だよ。ジエイク……そう。今日も仕事でね……ああ。研究所？ そう、研究所の仕事のほうが忙しくてね」

母が住むオハイオ州までは二〇〇〇マイル。電話機の上に積み込あげた硬貨が、マシンガンから撃ち出される銃弾のように投入口に飲み込まれていく。

「そう、今年も顔を出せなくて済まない……ガットマン先生によろしく。感謝祭おめでとう」

最後に母の顔を見たのはいつだっただろう。罪悪感が胸をついた。受話器を置き、扉の壊れた電話ボックスを出る。息が白い。ジャケットの襟をかき合わせる。道路の両脇に広がる平原は灌木のカーキ色と雪の白に塗り分けられ、十一月のワイオミングはすでに雪景色だった。

遠く、鋸の齒のように切り立ったウイテカー山地^{レンジ}の山々が、傾きかけた陽に照らされて北はカナダから南はテキサスまで続く大平原に長い影を落としている。手を伸ばせば届きそうな気がした。遠近感が狂うほどに空気が冷たく澄んでいた。

「十八ドル七五セント」

ガスタンドの店内に戻ると、カウンターの^中でぬくぬくと温まりながら白黒テレビを見ていた老人がジェイクの方を見て、ガソリンの代金を告げた。保温ケースの中でしなびかけたコーンドッグがじりじりと熱せられていたが、食欲をそそる眺めではなかった。コーヒーだけ買って、20ドル札で払った。

「……クレイン山荘ってわかるかな？」

「ああ？」

煮詰まって苦いコーヒーで胃を温めながら、ジェイクはカウンターに地図を広げる。

「ああ、クレインロッジか」

老人のニコチンとガソリンで荒れた指が道路地図の上を滑る。現在地……国道上の目に見えない点から、二つの山地に囲まれた、点々と湖沼が並ぶ一点を指し示す。

「このまま五〇マイル走って、スタンリーヴィルで市道に入ればいい。一本道だから間違うことはなかる」

名前は記されていないが、国道から分岐する細い道が、老人の指先で行き止まりになっていた。

「しかしまあ、何の用だね。あんなところに」

「いや、その……」

「……もう何年も前になるかな……あなたのほかに、そうやってあの山への道を聞いてきたやつがおった……」

老人の関心は、ジェイクの返答よりも自らの記憶の中に移っていったようだった。ぼんやりと目を遠くにさまよわせながら、記憶の中のどこか遠くを見ていた。

「妙なものだな。あそこに鶴ツレイシなんぞ来たためしがないのに」

道路まで雪は積もっていなかったが、陽光は山嶺にさえぎられて、早くも陰り始めていた。ジェイクはヘッドライトを付けると、ヒーターのダイヤルを少し強めた。制限速度びつたりの時速五〇マイルで車を転がす。対向車も後続車もおらず、目に映る人工物といえは道路と並走する送電線だけ。口にしてみれば単調な光景だったが、どこまでも続くまっすぐな道と荒々しくインクで描いたような山麓の眺めには、どこか圧倒されるようなものを覚えた。

「……ハイジャック犯の処遇に関して、イタリア、エジプト両国との協議が……」

カントリー・ミュージックを奏でていたノイズまじりのカーラジオがニュースに移る。天気予報は晴れ、山間部では

雪。ローカルニュースに続いて一月半前のアキレ・ラウロ号ハイジャックの続報を伝えていた。テロリストが持ち込んだ爆発物を誤爆。船体は損傷するものの、殺害された一名を除く乗員乗客はエジプト軍によって保護。テロリストのうち二名は爆発により死亡するものの、残りは投降。その処遇をめぐってエジプト、船籍国のイタリア、そして国民を殺害されたアメリカがあわや一触即発の事態に……そこまでアナウンサーが伝えると、ニュースは次の話題に移った。

一か月前のテロ事件。関心は薄れ始めていた。そして新聞にもラジオにも、あの潜水装備を付けた謎の男も、ジェイクが見た魚雷の航跡も、まるで報じられた形跡はなかった。

ジェイク自身はと言えば、エジプト海軍のタグボートに救助され、アメリカ軍の輸送機で帰路につき、そのまま事情聴取を受けただけで職場に復帰していた。

ラジオのチャンネルを変える。物悲しい、ブルーズ・ギター。普段は聞かない音楽だったが、今の気分には合っていた。助手席に置いた地図に目を落とす。陽の高いうちに着きたかったのだが、予定よりも遅くなってしまった。目を細めて距離計を睨みながら、薄闇に暮れゆく行く手に目を凝らす。ガススタンドの老人が言っていたことが確かなら、そろそろこのあたりのはずだが……車にもGPSがついてくれればいいのだが。軍で導入の始まった衛星測位システムのことを思い起こす。民間用にも解放されたのだったか？

山から吹き込んだ寒気が何もない荒野を渡り、昼間の陽気で温められた道路から乳白色のもやが立ち上る。黄昏の闇

と霧が視界をふさぎ始めた頃、ヘッドライトに朽ちかけた（ヘクレイン ヒュッテ 荘）の看板が浮かび上がった。

バンクーバーから密輸した酒で財をなしたシアトルの小金持ちが、ウイテカー山地を望むワイオミングの片田舎に山荘を建てようとしたのは大恐慌が始まる直前だった。冬はスキー、夏はゴルフと池にボートを浮かべての避暑。夜にはシカゴやカンザスから取り寄せたジャズのレコードが奏でられ、中西部にトラックで運ばれる途中のウイスキーが味見される。山荘の礎石が据えられる前に恐慌が起こり、設計図はモダニズム建築運動の影響を受けてより簡素で近代的なものに書き直された。やがて戦争があり、土地と建物の所有者は転々と移った。空港ができ、スキー客は州内のもっと便利で整った地域を好んだ。

駒形切妻屋根の古めかしい納屋の前に車を停めると、ジェイクは山荘を見上げた。車を降りると、山から吹いてくる風が一層冷たく肌を刺す。山荘の半分はデッキを湖上に突き出すように乗り出して、葦で縁取られた湖から立ち上る乳白色の霧が、大きなフランス窓のカーテンから漏れる明かりを柔らかく拡散させていた。山荘の外観はアメリカ新植民地様式と二〇世紀初頭のブレイリー・スタイルをまぜこぜにして、そこに本で読んだ戦間期ヨーロッパのモダニズム建築を取り入れたといったような風で、猥雑でとりとめがないが、妙に落ち着いたたすまいだった。

山荘と聞いてジェイクが想像していた大草原の小さな家よりも幾分かは現代的で、それ単体で見ると妙な統一感が

あつておかしくはなかった。しかし風雨を経て古びた納屋の隣に並んでいると、中西部の荒野に突然ニュー・タウンの郊外住宅が現れたような唐突な印象を受ける。

山荘に向けてジェイクが碎石舗装の小道を歩いていくと、来客の気配を察した持ち主が、玄関ドアを半分開けて顔を見せた。

「ジェイコブ・ガットマンだな」

「……ウィラード・ギブズ中佐？」

声の主は、一段高くなった玄関ポーチの上から来客を品定めするように、じつと見下ろしていた。警戒心をあらわに、というわけでもない。盤面に現れた駒に対して新たな手の打ち方を考えているチェスプレイヤー、そんな思索的な印象を受けた。

「遅かったな」

「陽のあるうちにつきたかったのですが、飛行機が遅れまして。すみません」

「気にするな」

鷹揚に手を振ると、ギブズはドアを開け、ジェイクを屋内へと促した。

「この国では爆弾を積んでない飛行機は時間通りに飛ばないことになってる」

ジョークなのだろうか？ あいまいな笑みを浮かべて、ジェイクは招き入れられるままに部屋の中へと入った。

「上着はその辺に適当に」

山荘の内装もまた、部屋同士が広々とつながった近代建築と古めかしいコロニアル・リバイバル様式の折衷だった。玄関を入れてすぐの居間はダイニング・キッチンと続きになっていて、暖炉では本物の薪が快い香りを立てながらばちばちと音を立てて燃えていた。キッチンとダイニングを隔てるカウンターはきれいに磨かれ、オレンジとコーヒーマーカ―が置かれている。湖に面したデッキへとつながる大きな窓にはロールカーテンが下りていたが、晴れた日にはウィテカー山地の雄大な景色が望めるのだろう。

そして、そこかしこに並べられ、或いは積まれている本。居間の壁を埋めつくす本棚には、歴史、文学、心理学、宗教……数学や物理学の本もあった。ところどころに空隙があり、何冊かはコーヒーターブルやキッチンカウンターの上に置かれている。ただの壁の装飾ではなく、実際に読まれているのだ。

「それで？」

独り身の軍人としては趣味のいい生活だな、といぶかりながらジェイクは上着をコート掛けにかける。最寄りの空港から半日かかる僻地とはいえ、果たして中佐の給料で、この休暇用の別宅を賄えるだろうか？ 好奇心と疑念を押さえきれずに部屋のあちらこちらを見回すジェイクに構わず、ギブズは定位置と思しき暖炉の前のアームチェアに腰を下

ろした。

「俺について何を知っている？」

「え？」

「何か知りたいことがあるはずだ。そのために俺の持っている情報が必要だ。C I Aではそういうものの考え方をするんじゃないのか？」

独特な、相手を戸惑わせるが、直截で能率的な物の話し方だった。はじめてジェイクは、ギブズの顔をまじまじと見た。

「……ウィラード・ギブズ海軍中佐」

海軍特殊戦部隊員としてベトナムに三度従軍、戦傷章、青銅章その他受賞。加えてC I Aと共同の秘密作戦で公にできない戦功多数。ベトナムから帰還後はグレナダ、パナマで実戦参加。特殊部隊隊員としての申し分ない戦歴。ジェイクは資料で読んだギブズの経歴を諳んじる。しかしいま目の前にいるギブズは、ベトナム帰りの古強者と聞いて想像していたタイプとはどこか違った雰囲気のものだった。

年齢は記録によれば四〇歳。髪には白いものが混じりつつあるが、海軍制式の黒いセーターの下の肉体は引き締まっている。しかし、本棚を背に暖炉の前に座ってくつろいでいる姿は、兵士というよりは研究休暇中の大学教授、といっ

たような印象を受ける。

「想像していたタイプと違ったか」

見透かされたような気がして、ジェイクは押し黙っていた。ジェイクの答えを待たず、ギブズはコーヒーターブルの上のグラスを傾け、続けた。

「……朝から晩まで射撃場で九ミリパラベラムを撃ちまくり、終わればゴージャスなお姐ちゃんのいる酒場で浴びるようにバーボンをかっ食らう。海軍きつての荒くれもの、特殊戦対テロ部隊員……そんなところを想像していたか？」

「中らずといえども遠からず、ということですか」

「ジェイコブ・ガットマン」

ギブズは一語一語、区切るようにその名を発音した。

「……CIA。作戦部門ではなく情報部門の人間が俺のところに来るのは珍しいな。ハーバードでの専攻は応用数学。

卒業後は奨学金をとってオックスフォード大学院。なのに学位を取ると海兵隊に志願し三年間勤務。のち退役してCIA、情報本部で分析官として勤務。お前さんの方こそ、アイビリークまで出て国家に奉仕するタイプには見えないがね。ウォール街でマネーゲームでもしてればもっといい暮らしができるだろうに」

「よくご存じですね」

ジェイクは内心で舌を巻きながら、せめてもの抵抗を試みる。

「……今は合同対テロセンターの配属ですが」

「このささやかな農場ファームは見た目ほど無防備じゃない。わざわざここまで来るようなモノ好きの経歴くらいは調べろさ。空港で借りたレンタカーの車種とナンバーまでな」

「CIAのことがあまり好きではないようですね？」

ギブズの口調にかすかな苦々しさを感じ取って、ジェイクは釘を刺した。

「CIA、FBI、IRS税務署……三文字略称の政府機関のことが好きなやつなんているか？」

「US合衆国海軍はどうなんです」

「なかなかいいところをつくな」

ギブズは椅子に深く背中を預けると、再びグラスを傾けた。

「お前さん個人の話じゃない。ベトナムこのかた、どうにも愛国心だの忠誠だのというやつは不人気だな。それが80年代ってやつなんだろう」

ギブズは手のひらを上に向けると、肩をすくめた。

「お互いについて知るべきことはだいたい知っているようだ。そろそろ本題に入っても構わないぞ」

ジェイクはキッチンカウンターの傍らに立ったまま、話の切り出し方を考えあぐねていた。ここまでの車中、どうやって話をするかリハーサルしてきたつもりだったが、いざ逢いに来た目的の当人と目の前にすると、戸惑いがあった。手持無沙汰のまま、滑らせた手がカウンターに置かれた酒瓶に触れる。

「察しの通りだ」

無言のまま酒瓶を撫でるジェイクに視線を送り、ギブズは目をすつと細めた。

「俺も確かにナムにいた頃……正確に言えば1971年までだな。アルコールの問題を抱えていた」

ソビエト製のストリチナヤだった。冷蔵庫から出されてまだ時間が経っていないのか、うっすらと水滴で曇り、冷たかった。

「今はもう、昼にビールを一杯、夕方六時にマティーニを一杯。それでおしまいだ。それも休暇中だけだ。飲むか？ ウオッカ・マティーニ、ステアではなくシェイクで？ シェイカーがあったかな」

「……ジェームズ・ボンドは嫌いです」

「現実のスパイの仕事とかけ離れているからか？ ただの無害な娯楽作品だろう」

ギブズは静かに笑う。妙に気分を傷つけられた気がして、ジェイクは自分の口調がどこかとげとげしくなるのを感じた。

「中佐だって好き好んで（ランボー）を観たりしないでしよう」

「その映画は見たことないが、なんて言ったかな……あのドイツ風の名前のボディービルダーが出てくるやつ。あれは観たよ。なかなか面白かった」

ジェイクの皮肉を意に介した風もなく、ギブズは続けた。

「それで？ 酒と映画の話で一晩過ぎず気か？」

「まずは、お礼を」

「？」

「ばちん、と暖炉の中で薪が爆ぜた。ギブズはグラスのふちを指で撫でながら、ジェイクが言葉を継ぐのを待っていた。」

「……アキレ・ラウロでの件です」

「一言声を聴いただけだったが、ジェイクには確信があった。潜水マスクで顔こそ見えなかったが、あの時、テロリストを撃ってジェイクの命を救ったの戦闘スィマーは、この男……ウイラード・ギブズだ。」

「今回は名前のせいで苦勞したな」

「……ぼくはユダヤ系じゃありません」

「そうだろう。パンツを下ろして見せてやればよかった」

冗談めかしてはいたが、その声色に感情の色は読み取れなかった。

「ユダヤ系の名前だからユダヤ人。連中はそういう考え方をする。時として事実よりも、『誰が』『どう考えるか』が問題になる」

半ば、ジェイクではない誰かと話してしているような口ぶりだった。あるいは自分に言い聞かせているのかもしれない、そんな気がした。

「……アメリカ軍は公式にあの船には関与していない。以上だ」

「はい」

「だが、もしかかわった奴に会ったとしたら、礼を言っていたと伝えておこう」

「……ありがとうございます」

「あの老人は残念だった。お前さんの責任じゃない。気に病むな」

「はい」

重苦しいが、気まずくはない奇妙な沈黙が過ぎり、やがてギブズの方が話に水を向けた。

「俺が内輪でなんと呼ばれているか、知っているんだろう？」

「女の尻を追いかけまわす奴、ですか」

COLGRU。艦隊収集グループという、SEAL内部に創設された曖昧な名前の部署が書類上ギブズ中佐の所

属だった。その部隊の目的も任務も指揮系統も、書類の上以外で実在するのかどうかすらも定かでない。ある者は政府が関連を否認する任務のための極秘部隊だと示唆し、口さがないものは、海軍内部の下士官兵だけではなく、民間の女学生も含めて中佐が若い女ばかりをリクルートする私的なハーレム等と噂していた。

「そっちなない」

「……女殺し」

からん、とグラスの中で氷が音を立てた。

「〈艦娘〉を殺した男」

「機密取り扱い資格〈K〉は持っているか」

ただ静かに、ギブズは尋ねた。

「そんなものは存在しません」

「だろうな」

ギブズはグラスをテーブルの隅によけ、椅子を立った。

「わかるいが、電話をかける用件があったのを思い出した。しばらくくつろいでいてくれ」

見え透いた、だがお決まりの手順だ。政府職員にも一部をのぞいてその存在自体を知られていない、極秘よりも嚴重な機密取り扱い資格。その存在を口に出したら相手は存在すること事態を否定し、しかる後ペンタゴンの専用番号に電話をかけて相手が機密取り扱い資格をもっているか確認する。そうした存在自体認められていない取り扱い資格の一つが区分〈K〉……かつてはキーホール偵察衛星の画像情報に割り当てられていた秘匿名だが、いまその機密区分に割り当てられているのは〈艦娘〉に関する情報だ。

「飲み物も出さずに悪かったな。ウォッカ・マティーニが好みじゃないなら何を飲む？」

「車で来てますので」

「泊っていいかい。寝室と洗濯済みのシーツはある。どのみち最寄りのモーターまでは来た道を何十マイルか戻らなきゃならん」

「……では、ビールがあれば」

ギブズは冷蔵庫からハイネケンの瓶を出してカウンターに置くと、階段を上って階上へと消えていった。一人残されたジェイクは、スツールに尻を預けてビールを啜りながら、カウンターの上で開かれたままの本に視線を落とした。フレーザーの〈金枝篇〉。普及版ではなく、ハードカバーの全集だった。

「聖なる王の弑逆……」

しおりが挟まれたまま開かれていたのは、力を失った王が殺され、その聖なる力が次の依り代へと引き継がれていく記述の部分だった。大学の教養課程で読んだ記憶がある。

「……待たせたな」

「ぶっ」

音もなく、背後にギブズが立っていた。ビールの泡が気管に入ってむせこむ。そうやってベトナムでは敵の背後に忍び寄り、音もなく腎臓にナイフを突き立てたのだろうか？ 不穏な想像を振り払い、ジェイクはギブズの方に向き直る。

「確認が取れた。で、艦娘について聞きたいことはなんだ」

「……これを見てください」

足元に置いていたアルミのアタッシュケースを開けると、フォルダーをカウンターのの上に広げる。

「それに入れてここまで持ってきたのか？」

「ええ。なぜですか？」

ギブズはボアのついたトラックージャケットというジェイクの格好と、ピカピカに輝くアタッシュケースを交互に

眺めると首を振った。

「ワイオミングじゃ目立ちすぎる。次に来るときはもっと目立たないカバンにしろ。詐欺師か、もっと悪くすると宣教師だと思われるぞ」

ジェイクは答えずに、不鮮明な白黒の写真をフォルダーから出した。

「潜水艦だな」

「ソ連のタイフーン級戦略原子力潜水艦、その最新の一隻です。艦名は〈十月党員〉」

シカリープリスト

艦名はロシア語で発音した。おそらく正しい発音なのだろう、とギブズは推測した。大学か、或いはCIAに入ってから身に着けたのか。ジェイクは写真に次いで、極秘の判が捺された資料を広げる。それぞれが複数の都市をターゲットに変える破壊力をもった、二〇本の弾道ミサイル発射筒。核発射能力を持つ魚雷発射管。4万トンの鉄の塊と、それを航行させる原子炉。推測で補われ、そこかしこに疑問符が補われた内部構造図の上のジェイクの指がなぞっていく。

「で、そのフネが？」

「バレンツ海で消息を絶ちました。おそらく核弾頭を積んでの試験航海の最中だと思われます」

「状況は？」

「建造中から国家偵察局が衛星写真で監視していました。ザーパドナヤ・リーツァ基地から最初の航海に出る際も、コラ半島沖のソ連領海ぎりぎりからこちらのロサンゼルス級が追尾していました。途中まではバッシブ・ソナーで捕捉していましたが、ここで完全に痕跡を消しました」

ムルマンスクから北東、ノバヤゼムリヤ島に向かう中間あたりの何も無い海。(ジカーブリスト)の予想航路図の一点に、ジェイクの指が止まる。

「事故の可能性」

「圧壊音、機関の不調、救難信号、放射性物質の増加、いかなる痕跡もモニターされていません」

「意図的にこちらの追尾を振り切った」

「ソ連側の通信頻度も上昇しています。特に哨戒航空隊と潜水救難部隊。実際に哨戒機の出撃も頻繁になっています。予定されていた行動ではありません」

「それでお前さんの結論は」

「結論というよりは仮説ですが、この潜水艦に何らかの形で艦娘がかかっている、と」

「それで？」

「あなたの意見を聞きたい」

「艦娘について何を知っている？」

まるで大学院の口頭試問だ。かすかに口の中が乾くのを感じながら、それでもジェイクはよどみなく答える。

「大日本帝国海軍が開発した海上人間兵器。軍艦としての名前と、人間の少女としての外観を持ち、洋上または水中をそれ自体の意志を持って行動する。通常兵器での破壊は困難だが、艦娘側からは在来艦船を破壊可能。第二次世界大戦終結後はそのコントロールが失われ、民間船舶と軍用艦艇との区別なく攻撃し、海上交通線を脅かしている」

「現時点での脅威は」

「拡大しつつある」

ギブズは静かにうなずき、カウンターのの上に広げた資料から目を上げた。合格、というところか。ジェイクはほう、と息を漏らす。

「……問題の潜水艦に艦娘がかかっているとすれば、例えば？ お前さんはどう思う」

「艦娘の攻撃を受けた、とは考えられませんか」

……あの声。地中海の生ぬるい海水に浮かびながら、アキレ・ラウロが傾いていく時の記憶。姿の見えない、少女の声。何かぞわぞわとしたものが背筋を降りていく。ジェイクはビールで喉を潤しながら思い起こす。あの声は艦娘のものであったのだろうか。

「ちがうな」

ふるふる、とギブズは左右に首を振り、ジェイクが持ってきたタイフーンの内部想像図の上に指を滑らせた。

「この潜水艦そのものが艦娘だ」

その言葉がジェイクに与えた反応を見定めるように、じっとその目を見た。

「……あまり驚かないようだな」

「中佐なら、そう考えるところでした」

「ということは、コールドフット資料に目を通してあるわけだな」

「古いのですが、参考にはなりました」

ギブズは資料から目を離し、キッチンカウンターに背中をもたれて、その言葉を聞いていた。その資料をノルウェー沖に浮かぶ流水の上から回収してきたのがギブズ当人だったことは黙っていた。

「ソ連は戦後すぐから艦娘の軍事利用を計画していました」

「アメリカも、そしてイギリス、フランス、統一ドイツ、それに中国もな。核に次ぐ超大国の証か何かだと思っているらしい。当然南北日本も本土決戦で散逸した資料を後生大事に抱えているはずだ」

ギブズは十四年前のミッドウェーを思い出す。南日本海上警備隊士官を名乗って現れたあの艦娘。どこまで南北日本

政府も関わっているのか。

「だがうまくいっていない、というのがこれまでの見方でした」

「そもそもがオカルトだ。女の子に軍艦の魂を宿して戦わせるなど。まともな軍人の考えることではない」

ジェイクは室内のそこかしこに積まれている書籍とその言葉をつなげて考えた。中佐が神話や宗教に関連する本に興味を持っているのも、もしかしたらそのあたりが理由なのだろうか？

「だが、もはやそうではないと中佐は考える」

「あくまでも一つの可能性としてな」

そう言いながら、ギブズの目は何か確信めたものを浮かべていた。

「そう考える根拠は？」

「現時点では俺の勘だ。ただ……妙だと思わないか」

ギブズはとんとんと、指の腹で海図の上を叩いた。

「ムルマンスクを出てアメリカ本土への核パトロールに向かうなら、西に向かうはずだ。こいつが本当に艦娘なら、

グリーンランド・アイスランド・英国ギャップの音響探知網を気にする必要はない。まっすぐ大西洋に向かえばいい」

「……なにが目的なんでしょうか」

「わからん。だが、心当たりがありそうなやつは知っている」

こくん、と静かにジェイクはうなずき、別のフォルダーからまた一枚の不鮮明な白黒写真をカウンターの上に広げた。

「そうです。それがここに来た一番の理由です」

「ふむ」

ギブズは写真を一瞥しただけで、あとは暖炉で揺れる炎を眺めていた。マルボロの煙の匂いが脳裏に浮かんた。粒子の荒い写真の中、ソ連海軍の黒い外套と佐官用の毛皮帽をかぶって男は笑っていた。

「パーヴェル・ミハイロヴィチ・ボリシニコ一等海佐」

「……通称〈使徒ミハエリス〉」

端正な英語を話すソ連海軍情報将校。サイゴンでギブズが瑞鶴暗殺作戦のブリーフィングを受けたとき、あの男もその場にいた。

「今はどこにいる？」

「カプールです」

「……なるほどな」

得心が行った。ジェイクのイタリヤ出張の理由。共産主義政権に国を追われたアフガン国王はローマで亡命生活を送っている。その周辺にいる旧アフガン政権王党派に接触するのが目的だったのだろう。

「直接ミハエリスに会ったことがあるアメリカ側の人物で、存命中なのはあなただけです」

ということは、あの時ブリーフィングに同席していたCIAの背広組もこの世にはいないのか。コンラッド大佐は休暇中のスキー旅行の最中、心臓マヒで死んだと聞いた。まるで瑞鶴の呪いのようだな、と、ギブズは迷信めいた連想に苦笑する。

「我々はこの人物に接触する必要があると考えています」

我々。この若造とあとは誰だ。CIAの上層部。或いは長官レベル。国家安全保障会議の誰か。ひよっとすると大統領。

「決まりだな」

いや。こいつと、俺だ。ギブズはカウンターから背中を引きはがして、ジェイクの方に向き直った。

「アフガンに行く」

1986年1月11日 ロサンゼルス国際空港 出発便保安検査場

「おっと」

金属探知機が再び警告音を発した。

「すみませんね」

上着もズボンのベルトも靴もすべて脱ぎ、直接触れての身体検査も行った。保安係員は申し訳なさそうな顔を作つて、金属探知機を手に男の前に立つ。

「……多分、ここだ」

男は気にした風もなく、愉快そうにこめかみの横で指をくるくると回した。男の言う通り、金属探知機を額の横に当てると金属探知機はピーっと甲高い音を発し、ランプを点灯させた。

「ベトナムだよ。手榴弾の破片がまだ残っていてね。脳に近すぎて取り出せなかった」

「そうでしたか」

保安係員も従軍経験者だった。あの蒸し暑いジャングルの記憶を二人は同時に想起して、同朋意識をにじませた笑みを浮かべた。

「自分は陸軍第二十五師団でした。あなたは？」

「海軍の舟艇部隊さ」

「国家への奉仕、^{サービス}ご苦労様です」

「ありがとう」

踵をそろえて敬礼する係員に、鷹揚に答礼すると、男は手荷物を受け取り出発ロビーへと消えていった。

シンガポールで乗り換えて、カレー用を横断する航路。眠っていた男は、ふと目を覚ました。成層圏から見下ろす海の色は、十五年前と同じ澄んだ青をしていた。

男は狭い座席の上で首の向きを変え、また目を閉じた。

1986年1月14日 パキスタン 連邦部族管理地域アフガニスタン国境付近

ベシャーワルからサビと破孔を派手な装飾で隠したトラックで揺られること半日。ジェイクは明かりを消したトラックの荷台から降りると、こわばった背中をのばした。切り立った崖のすれすれを交互通行で行き交いながら、その合間にルート66でも走っているように飛ばしてきた道のりを経て、ジェイクは身も心もタンブラー乾燥機に放り込まれたようにしわくちゃだったが、続いて降りてきたギブズは平然としていた。

「快適な旅だったかい」

ロンドン下町訛りの英語を話す男が、トラックから降りてきた二人を出迎えた。

「パキスタン航空のエコノミークラスに比べればな」

「ガズだ」

「ガズ？」
G A Z

ソ連の国営企業の名前だ。ジェイクが聞き返すと、ガズはにんまりと笑った。白い歯が赤い光の中に浮かび上がる。

「本当はギャリーだが、みんなそう呼んでる。ウィラードに……ジェイクだな」

イギリス人はファーストネームだけを名乗って、手を差し出す。姓は名乗らなかつた。名乗ったとしてもどうせ偽名だろう。作業員が偽名を使う場合、ファーストネームは呼ばれてもすぐ返事できるような本名のまま、姓だけ変えることが多い。ジェイクとギブズが使っているパスポートも、ウイグ 国務省が発行してCIAが用意した別名義のものを使っていたが、ファーストネームは同じにしていた。

ガズの悪手はがっしりとして力強かつた。ジェイクはガズが握り返してくる力で相手を値踏みしているような気がした。アフガン帽に足まである長い上着、毛織のベストに古タイヤから作った、サンダルともスリッパともつかない靴という姿で、恰好からはあたりで忙しく立ち働いているアフガン人ムンジャヒディン 義勇兵と区別がつかなかつた。

「あんたがここの指揮官か？」

「仕切っているのは、ロンドンではベルグレイヴィアあたり的高级住宅街にいる連中さ。俺はただの下働きだ」

赤いフィルターをかけた電灯の明かりの下、周りにいるアフガン帽の男たちが手際よくトラックから荷を下ろし、眠そうに座っていたロバの背に積みかえていく。

「せかして悪かつたな。もう少しこつちの気候に慣れてもらう時間があればよかつたんだが、ロシア人が攻勢を強めている。今月に入って、国境付近のヘクマティヤール派キャンプが襲われた。場合によっては特殊部隊スベツワツクスがパキスタン領

内に侵入してくるケースも考えなければならぬ」

イギリス人は足元を照らしながら、木の枝で砂の上に大雑把な地図を書いた。

「今夜このまま国境を超え、幹線道路を避けつつ北上する。本隊はバンジール溪谷へ向かう。カプールへ向かう別働隊は二チーム」

砂の上のルート上に分岐を描いていた枝先が、ロバの背に括りつけられた木箱を指した。

「ひとチームはあれだ。空港で花火を打ち上げる。そしてもうひとチームがあんたたちだ」

ガズは交互に、ギブズとジェイクの顔を見た。

「カプールの手前でチームは分かれる。攻撃チームが首尾よく花火をぶち上げたら警戒は強化される。潜入するとしたらそのタイミングしかない。しかしまさか、カプールに潜入したいと言いつつ出ずとはな。CIAが人を出してくれると聞いたときには驚いたが」

「CIAバキスタン支局はこの作戦に関知していません」

「だろ。連中妙にヘクマティヤールに肩入れして、マスード派には知らんぷりだ。エンジンア・ヘクマティヤールに支援を送ってもソ連相手に使う気なんてないのにな。アフガン人同士で殺し合うためにため込んでおくのがオチだ。で、あんたたちが一緒に持ってきた荷物の中身については聞いているか？」

「いいえ」

「聞かなくて正解だ。聞いていたら途中で運転手を撃ち殺して雲隠れしていただろうしな。まあ、つまりは武器と金だ」

その「武器」の中にはカプールの空港で打ち上げる花火も含まれているのだろう、とジェイクは推測した。携帯対空ミサイルステインガー。ソ連が運用する、強力な航空戦力に対抗するために義勇兵たちが最も必要としているもの。しかし、最初の攻撃は、彼らが警戒し始める前、もつとも無防備な瞬間に、最も効果的な対象に行わなければならない。

「あんたたちにソ連兵を殺してもらいたいわけではない。だが、赤外線誘導ミサイルの使い方や白熱電球さえ見たことのない連中に教えるのは一苦労だ。そのための協力はしてもらいたい」

「俺たちの偽装身分は？ ソ連兵に生きて捕えられた場合は？」

ギブズが尋ねた。考えたくない質問だったが、考慮しておく必要はあった。

「ジャーナリストとそのガイド、というのがロンドンの連中の回答だ」

ガズは積み上げた木箱の上に置いてある、日本製のカメラを顎で示した。

「あまり信憑性があるとは思えないな。『やあいワン、俺たちは「タイム」に載せる写真を撮りに来たんだが……おや、こいつはなんだ？ メイブルリーフ金貨にステインガーミサイルだ。どうしてこんなものがあるんだろうな』」

「笑えるぜ」

くつくつ、と声をひそめて、ガズは笑った。

「それじゃあ安全毛布は二重にしよう。最初はジャーナリストで押し通す。それが維持できなくなったら……そうだな。半分だけ真実を話せばいい」

「ムジャヒディンへ運ぶ荷物の護衛と監視のためにCIAに金で雇われた傭兵、そんなところか」

「ああ。それならあまり苦しませずに殺してくれるはずだ」

ガズは肩をすくめると、ひだの多い衣服のどこかに隠していた拳銃を取り出し、グリップの方を向けて二人のアメリカ人の方に差し出した。ブローニングの九ミリだった。

「一応預けておく。どっちが持つ？」

「俺が」

ギブズは銃を受け取ると、スライドを引いて装弾を確認し、セフティをかけてズボンのベルトに差し込んだ。

「お前、銃は撃てるか」

その様子をじっと見ていたジェイクに、ギブズは小声で尋ねた。

「知っているはずでしょう。海兵隊で三年間勤務していました。ライフルも拳銃も撃ち方は知って——」

「人を撃つたことはあるのか？」

「……いえ」

「なくて幸運だった」

皮肉でもなく、戦場で人を殺したことのないジェイクをさげすむでもなく、ただ淡々と、しかし心からそう思っている。そういう口ぶりだった。

「さて、他に質問は？」

ギブズが銃を収めると、ガズが聞いてきた。

「出発前に飯が食える場所と、クソができる場所はあるか？」

「あるとも。案内しよう」

ガズが笑った。この男は兵隊が必要とするものを知っている。そんなかすかな仲間意識をにじませた笑みだった。

イギリス人が先導し、四頭のロバを従えた八人の義勇兵が続く。それぞれが古めかしいリー・エンフィールド小銃を背負っていた。その後方、隊列の最後尾にジェイクとギブズ。一行は、月明かりが照らす中を一步一步道なき丘陵を北に向けて歩いていった。

「……大丈夫か」

キャンプを出発して四時間。延々とただらかな上り坂が続く、国境に向かうにつれて一步ごとに標高が上がっている。一行は人目に付く街道を避けるため、峠を迂回し山地をそのまま突っ切るルートを取っていた。ジェイクにとって限界というわけではないが、タフな道のりだった。歯を食いしばりながら一步一步足を前に出すことだけを考えて歩き続けるジェイクに、最後尾に続くギブズがささやきかける。そのあたりの公園でも散歩しているような涼しい顔で、薄くなつていく大気も刺すような寒気も苦にするそぶりはなかった。

「ずいぶん優しいじゃないですか」

「お前がトチると俺が死ぬ。まだ旅は始まったばかりだ」

ジェイクが肩にかけていたカメラバッグを半ばひったくるように引き取ると、ギブズはバッグを肩にかけて歩き続けた。ジェイクよりも一回り年上で、兵士としての肉体的なピークは過ぎ始めている年齢のはずなのに。心の中で舌を巻きながら、それでも背中が軽くなったことにホッとする。

「なぜ来た」

「なぜって……それは、カプルーで」

「なぜおまえが自分で来たのか、という意味だ」

ジェイクが黙っていると、ギブズは歩きながら続けた。

「軍隊経験があるとはいえ、デスクワーク専門の分析屋だ。わざわざ フィールド・オペレーション 現地工作に出張る必要はない。俺に任せて、ラングレーで椅子を磨いていればよかっただろう」

「……これは部門合同の対テロ作戦です」

答えになっていないことは分かっていた。ギブズの言葉遣いは辛辣だったが、口調には皮肉の色も侮蔑の香りもなく、ただ単に疑問を口に出した、そういうふうだった。数日過ぎすうちに、ジェイクはこの古強者ランボーがそうした喋り方をすることに慣れ始めていた。決して寡黙ではなく、ユーモアのセンスもあるが、意図して人を遠ざけるような独特の空気。意図して人に交わろうとするでもなく、一人でいるときはなにか自分の殻にこもって解きたい命題と向き合っているような、思索的な雰囲気をもとっていた。

「自分の作戦ですから」

「そうか」

それ以上、何もしゃべらずに、二人は歩き続けた。やがて山の尾根に差し掛かりかけたころ、先頭を歩いていたイギリス人が手信号で停止を告げた。

「紳士諸君」

稜線に影が出ないよう、身を低くして地図とコンパスとをにらめっこしていたガズは、顔をあげるとにっこりと笑って告げた。

「アフガニスタンへようこそ」

隊列はアフガニスタン領内に入ってもしばらく歩き続け、夜が明け始めたころ、廃墟になった村の一つで停止した。村には、別の義勇兵の一団が待ち構えていた。様々なAK自動小銃で武装し、ソ連製の無線機を装備している者もいた。

「ここからは彼らが同行する」

荷を積んだロバを引き渡して、パキスタンから同行してきたチームがもと来た道に戻っていくと、焚火を囲みながらガズが新しいチームのメンバーを一人一人紹介した。が、「こいつは〈ヤギ面〉」「こっちは〈鷲鼻〉」と言ったふうで、どう見ても本名とは思えなかった。紹介される側もわかっているのかわかっていないのか、にこにこ微笑みながらギブズにはわからない言葉で頷き返すだけだった。

「……彼がこの分隊の指揮官です」

ギブズを背後から肘でつつくと、ジェイクが最年長の男を視線で示した。無線機を背負い、真新しい折り畳み銃床の

A K 7 4 を肩から掛けている。

「あの若者は彼の息子、あっちは従兄弟だそうです」

「言葉が分かるのか？」

「ウルドゥー語は通じるみたいですね。なんとか」

ギブズは肩をすくめた。

「ウルドゥー語なんか喋れたのか？」

「覚えました」

「いつ」

「二か月ほど時間があつたので、作戦準備の合間に」

「そりゃ役に立つだろうな、特に……」

ギブズは片言の英語とウルドゥー語、それに身振り手振りで歓談しているガズとムジャヒディンたちをぐるりと見

回した。

「電気も自動車も見えない連中にステインガーの使い方を学んでもらわなきゃならんとなればな」

「ミサイルの方はお任せしますよ」

「そっちは俺の仕事だ」

そういいながら、ギブズは出発前にシミュレーターで再確認したステインガーの取り扱いを頭の中で思い返す。

フォークランドに向かう途中のイギリス特殊舟艇部隊の連中に使いかたをレクチャーしたのは何年前だったか……敵味方識別装置^Fの取り扱い^Iは省略してもいいだろう。ここで空を飛んでるものには、赤い星がついてるはずだ。

パキスタン国境からカブール近郊まで同行する間、カブール空港でソ連機を攻撃するチームにステインガーの使い方を訓練し、攻撃計画の作成を支援する。それがカブール入りを手助けすることへのイギリス側の交換条件だった。ガズとギブズ、そしてジェイク。三人の白人と四頭のロバを伴った一行は、夜について移動し、夜が明ける前に隠れ場所を探して休息した。

「見るよ」

アフガニスタンに入って一週間ほどしたある夜。峡谷を見下ろす村の廃墟に腰を落ち着けると、ガズは窓際に立って白みかけた空の下に広がる峡谷を肩越しに示した。かつては水路にそって畑と果樹園が広がる農村だったのだろう。今は日干し煉瓦の家々は住むものもなく崩れかけ、石垣で区切られた畑のそこかしこには爆弾の破孔が空き、野ざらしにされた家畜の死骸が白骨を晒していた。かつての美しさがしのばれるぶん、寒々しい眺めだった。

乾燥させた家畜の糞で火をおこし、薄い紅茶と堅い平焼きパンの食事を用意していたムジャヒディンの一人が、小声で何事かジェイクに囁いた。

「……この村の出身だそうです」

ムジャヒディンは激高した様子で何事か叫んでいたが、やがて涙を浮かべて家の奥の方へと立ち去った。ガズもそのあとを追って焚火の影の暗がりの方に消えていった。

「ミグがやってきて、爆弾と地雷を撒いていった、と。多くが死に、生き残った者も立ち去ったと言っています」

意識と省略が入り混じっているのだろう。ジェイクが通訳した内容は、男がまくし立てていた言葉数からすればあまりにも端的で短かったが、ギブズは省略した細部を聞き返さなかった。ギブズが無感動に黙っているの、ジェイクの方から口を開いた。

「……何も思わないんですか、中佐？」

「どう感じるべきだと？ 怒りか？ 同情？」

ギブズは腕を組んだまま窓にもたれて立ち、暮れ行く空を眺めていた。

「俺たちならもっと徹底的にやった。日本でも、ベトナムでもな」

「戦争だから仕方がないと？」

「お前さんは当為性と必然性を混同してる」

堅いパンを一口、ちぎって口に運びながら、ギブズは続けた。

「それが実行可能であれば実行される、というだけの話だ。より遠くから、より高くから、より安全に、より罪悪感を感じずに人を殺す。殺す相手の目を見ないで済むように。ナイフよりも銃、銃よりも爆弾、爆弾よりミサイル、極めつけが俺たちが選挙で選んだ指導者が押したくうずうずしてるあのボタンだ」

そこで初めて、ギブズの口調に微かな苦々しさが混じった。

「そんなものは戦争じゃない。まともな人間は人を殺せない、だからテクノロジーが殺す」

ジェイクが反論しかけたとき、ギブズは突如唇に指をあてた。

「聞こえるな？」

……まぎれもない、ジェットエンジンの甲高い音。

「ミグだ。火を消して身を隠せ」

その言葉を一言一句、ジェイクがウルドゥー語に翻訳して叫ぶと、屋内にいたムジャヒディンたちは弾かれたように焚火を叩き消し、銃を手に伏せた。

「見えるか？」

埃っぽい床の上をはいずってギブズの隣に伏せると、ジェイクは崩れかけた窓の影から空を見上げる。太陽が昇り始めた東の空、藍色が茜色に変わりかけたあたりに、二機編隊のずんぐりとした小柄な機影が浮かび上がる。アフガンのソ連空軍に配備が始まったばかりの フロッグフット スホーイ25、と識別した。ジェイクは頭の中でフロッグフットの諸元を思い起こす。赤外線監視装置はついていただろうか？ 付いていないことを祈るしかない。熱源を補足されたら逃げ場がない。ロバを休ませるために背中から下ろし、部屋の奥に積み上げてある木箱に視線を送る。

「例のブツを準備するか？」

ガズが身を伏せたまま二人の間に這い寄ってきて、囁いた。

「このまま行ってくればありがたいが、連中がこつちを発見すれば使うしかない」

屋内にいた全員が息を殺して目で追う中、フロッグフットは編隊を維持したまま甲高い音だけを残して西の方の空に消えていった。

「ほっとしたよ」

ガズがばんばんとアメリカ人二人の肩を叩いた。甲高いタービン音が消えてしまうと、そのささやき声が実際の音量以上に耳に響いた。

「とにかくアメリカ人は空を飛ぶものを見ると味方だと思ひ込む習性があるからな。いい反応だった」

無言でうなずき返すと、ギブズはジェイクを伴って、姿勢を低くしたまま焚火の燃えさしの周りに一同を集めた。

「あれがミグだ。空を飛んで爆弾を落とす。ミグは尻から火を出している」

ジェイクに通訊させながら、ギブズは焚火の燃えさしを一つとってミグ——説明のために、細かいソ連空軍機の装備機種は省略した——の飛行を再現した。この男たちは、産業革命がまだ到来しない世界に生まれて、自動車よりも先に飛行機を目にし、自分たちは最新の自動小銃と対空ミサイルを手にして戦うのだ。ベトナムでは立場が逆だったな、と場違いな笑みが浮かんでくるのを感じながら、ギブズは説明を続けた。

「ステインガーには目がついている。目は火を見ることが出来る。ステインガーはミグから出る火を追うが、時間に限りがある」

もう片方の手が地上から撃ちだすステインガーの軌道をシミュレートし、赤くくすぶる燃えさしを指で弾き飛ばす。シーカーを冷却し、誘導装置に電源を供給するための、使い捨ての電源・冷却ユニットの詳細な説明は省いた。

「今夜から、いよいよその使い方を説明する。ミグはもう、我が物顔で飛べなくなる。だが、まずは移動だ。潜伏場所を変える」

1986年2月1日 カブール東南約三〇km カーキ・ジャバル地区 攻撃発起地点

合流地点はヒンドウクシュ山脈を構成する山地の一隅で、高原の澄んだ空気を通して遠くカブール市街の明かりが地平線の彼方に見えた。標高が高く、人工の明かりが少ないせいで、星が綺麗に見えた。ずっと見ていると、星の海に吸い込まれてしまいそうな気分になる。白い息を吐きながら、ジェイクは空にかかる月を見上げた。くっきりと群青色の空に浮かぶ月影が却って現実のものでないように思われ、まるで亡霊が遠くから見下ろしているような気がした。火も起こさず、明かりもつけずに灌木の間に身を潜めていると、やがて明かりを消したままの南日本製ビックアップトラックが二台姿を現した。

「待たせたな」

車の助手席から降りてきた男は、バキスタンあたりでよく聞いた微かに訛りのある英語でガズに呼びかけると、連れてきた兵士たちに命じて手際よく荷の積み替えを始めた。この男も無線機を装備し、他のムジャヒディンより新しい銃を持っていた。仲間内での地位や権威が身に着けている武器に現われる。そういう文化のだと、出発前にレクチャー

された。寸鉄一つ身に着けていない自分はどうか見られているのだろう。

「ここでお別れだ」

「ああ」

ガズは梱包を解かれるステインガーを見守りながら、傍らに立つギブズに名残惜し気に語りかけた。ギブズがステインガーの扱いを教え、選抜し、ガズが攻撃計画を持たせた一団の男たちが、ビックアップの周りに集まっている。あの親子の姿もあった。若いだけあって、新しい機材への飲みこみも早かった。父親の方も厳しい気候と生活のせいで老け込んで見えるが、年はギブズと変わらないだろう。攻撃そのものは成功する、とギブズは踏んでいた。そのあと、ソ連軍の追撃を振り切って戻ってこられるかは五分五分だ。彼らはここで別れて、空港へ向かう。

「俺たちもパキスタンまで戻る」

「それは何ですか？」

ジェイクは、トラックから下ろしてロバに積みかえていた麻袋に目を留めた。ガズはその一つを開けて、中身を見せにくれた。

「ラピスラズリだ。原石のままパキスタンで加工して、ムジャヒディンが現金収入の足しにする。今のアフガンには他に売れるものがないんだよ」

明かりのない闇の中ではただの石なのか貴石なのかも判然としなかったが、今見上げている夜空と同じ色をしているような気がした。

「それでは、旅のご無事を」

「ああ。女王陛下によろしく」

「バッキンガムの園遊会に呼ばれたら伝えておくよ」

ガズとギブズは英語で別れを告げる、ジェイクがムジャヒディンたちにも通訳する。ジェイクはトラックの荷台で大事そうにステインガーを抱えている若者の手を握って何やら話しこんでいたが、やがてトラックはカプール空港とバングシール溪谷へ、ロバのキャラバンは南のパキスタンへとそれぞれ出発し、辺りは再び静寂に包まれた。

「……さて、残念ながら我々は徒歩だ。歩くぞ、海兵」

「中佐！」

ジャララーバードとカプールを結ぶ幹線道路から少し離れて並行に歩き続け、東の山脈から曙光が差し掛け始めた頃。ジェイクは足を止め、北の方の空を指さした。航法灯を点滅させながら上昇していく飛行機。朝一番にカプール空港を出発する、ソ連の輸送機だろう。

「ああ」

地平線の彼方で、何かがチカッと微かにきらめいた。ギブズは灌木の影に身を潜めて、覆いを掛けた双眼鏡で北の空をのぞき込んだ。もう一つ、光がレンズの向こうできらめいた。その二つの微かな光は尾を引いて上昇し、やがて旋回する輸送機へと追いついた。閃光。今度は裸眼でも、はっきりと見えた。根元から翼を失った輸送機は炎の尾を引き、傷ついた鳥が墮ちるように地平線の彼方へと消えていった。教えた通りだ。警戒線をかいくぐり、離陸する機、なるべく大きい機を狙う。着陸する途上で狙われれば立て直せるかもしれないが、離陸途上で推力を失えば悲惨な墜落に至る可能性が高まる。

彼らは仕事をした。他の何も考えないようにしながら、二人はあわただしく目を覚まし始めたカブール市外へと歩き出した。

同日 カプール市内 マルワンド・ロード付近 「カフェ・セレナ」

「犬のきんたまみたいに目立ってるな、俺たち」

ロシア語、英語、ベルシャ語で「カフェ」と記された店の中では、発電機が鈍い唸りを立てていた。

カフェ・セレナは中東・南アジアではどこにでもある、古ぼけたビルの一回を通りに向けて開けはなつたつくりの茶店だった。薄暗い店の半ばほどを埋める、プラスチックのテーブルで朝の茶を飲んでいる男たちの中で、ヨーロッパ人はジェイクとギブズ二人だけ。店に入って三〇分ほどになるが、店主も注文を取りに来る素振りすら見せない。新聞を読み、会話に興じている客たちも、その合間に警戒心を露わに不躑な視線を送ってきている。

時折あわただしく、店の外の通りをソ連軍の車列が砂埃を立てながら通り過ぎていく。今朝の輸送機撃墜はやはり成功裏に終わったのだろうか。

「……どうしましょうか」

「どうするも何も、お前の作戦だろう」

カプールの人民政府内に残留している旧王党派のエージェントと接触し、ミハエリスの居所を探る。そういう手はずを整えていた。しかし接触対象者は現れない。クリケット公園の秘密の隠し場所^{デッド・ド・ロッツ}で、次の接触場所を指定されたまで

はよかった。しかし……。

「今更ブランBを考えても仕方がない。気楽にしてろ」

「すみません」

「まあ、最悪歩いてアメリカ大使館に駆けこむかだな。まだ残ってるのか知らんが。さあどうする？ 待つなら待つで構わないが」

冷や汗をかくジェイクとは対照的に、向かいに座るギブズは平然としていた。緊張に耐え切れず、ジェイクが腰を浮かしかけた瞬間、店の表に錨のマークを描いたソ連版ジープ^{U A Z}が停まった。

「おやおや」

一人のソ連軍将校が車から降り、悠揚迫らぬ足取りで店の中に入ってくる。茶色の迷彩が施された野戦服^{アフガンカ}に海軍歩兵の黒いベレー。将校はサングラスを外して胸ポケットにかけ、嬉しそうに声をかけた。

「ウィラード・ウィラーデイチ。こんなところで会うとはね」

「……パーヴェル・ミハイロヴィチ……」

ポリイシコ一等海佐。通称（ミハエリス）、と、ジェイクは声に出さずに続けた。ミハエリスはギブズの顔を認める
と愉快そうに笑い、英語で話しかけた。

「とうとう私の名前を呼んでくれるようになったとは嬉しいね」

十五年前と同じ、綺麗だが特徴のない発音。イギリス人にはアメリカ英語に、アメリカ人にはオーストラリアかどこか遠くの土地から来たように聞こえる、そんな話し方をGRUで学んだのだろう。

「発音はひどいものだが」

腰を浮かしかけたジェイクを制して、ギブズがその隣に席を移すと、ミハエリスは四人掛けテーブルの向かい、もともとギブズが座っていたところに腰を下ろした。

ギブズは正面からミハエリスの顔を見た。その笑いかたも十五年前と同じ、そしてあの不鮮明な写真に写っていたのと同じ、どこか達観したような笑みだった。日焼けし、風雨に晒されてしわが刻まれているが、それほど老けた様子を感じさせない。そもそも、はじめて会ったときから中年にも初老にも見えるような、曖昧な顔つきをしていた。黒いベレーの下からやや伸びすぎた髪がはみ出しているさまは、土産物のTシャツの胸でいかめしい顔をしているチェ・ゲバラを思わせた。

「直接会うのは十何年ぶりかな？ その間にずいぶんと昇進したようじゃないか。そのうち私の方から敬礼しなきゃならなくなるな、ワイラード・ワイラードイチ」

「あんたの方も息災そうだな」

ミハエリスはベレーを脱ぐと、指先でくるくると弄んでいた。

「定年前に年金が少しは増えないかと祈ってはいるんだが、このまま海佐で終わりそうだな。ソ連軍の良くないところだな。星をつけて歩いている人間が多すぎるよ」

「海軍GRUのあんたがこんなところで何をしてる？ アフガンに海軍を作ったら次は文化省でも作るのか？」

「もともとスペツナズが私の古巣だね。定年前に最後のご奉公だ」

「ソ連もよほど人材が足りないらしいな」

「そういう君だって海軍じゃないか。だいたい、アメリカにだって インテリジェンス 情報局があるだろう。ソ連に文化省があるように」

「そのジョークは前にも聞いた気がするな」

ミハエリスはにやりと笑うと、二人のやりとりを半ば呆然と聞いていたジェイクに水を向けた。

「情報局と言えば、その若者はラングレーから来たんじゃないかね？」

「ジェイコブ・ガットマン。CIAだ」

「父称を存じ上げないのでアメリカ式で失礼するよ、ミスタ・ガットマン。まあ先刻ご承知だとは思いますが、私はパーヴェル・ミハイロヴィチ・ボリシコだ」

あつけにとられたまま、ジェイクは差し出された手を握り返す。自己紹介を済ませると、ミハエリスはばんばんと手を叩いて店主を呼んだ。

「飲み物も出していないのかね？ 共産主義化の弊害だな。何を飲む？ 私のおごりだ。はるばる来てくれた賓客だからな」

「この国にとって招かれざる客はあんたちだろう」

「ベトナムにとってアメリカ人がそうだったようにかね？ 我々はベトナムにいた頃のきみたちとは違う。アフガンは我々にとっては国境を接する友好国だからね。まだ日は高いが、一杯付き合わないか」

「仕事中には飲まないことにしてる」

「おや。てつきり休暇で訪れたのかと思ったが、それは残念だ。店主。私にはウオトカ。こちらの友人にはペプシを」
戦々恐々という顔をした店主が冷凍庫で冷やしたストリチナヤとグラス、アメリカ人にはキリル文字でブランド名が記されたペプシの瓶を運んでくると、ミハエリスはブーツの足を組んでギブズの方に向きなおった。

「なかなか意味深な組み合わせだとは思わないかね」

礼儀正しくグラスと瓶を突き合わせて乾杯すると、ミハエリスは一気に冷えたストリチナヤを呷った。

「アメリカはソ連にペプシを売り、我々は代わりにこのロシアの魂を提供する。純粹で、透明で、危険な液体だ。まさ

にマルクスの言う通り、資本家は自分の首を吊るためのロープを売る、というやつだな。さあ、おたがいもう十分に愛国心のほどは示しただろう。聞き耳を立てているアフガン人民政府情報部の連中も満足した頃合だ」

横目にギブズたちのテーブルを窺っていた客の中から、ひそかなざわめきが聞こえた。

「本題に入ろうじゃないか。いかに我々が親しい友人とはいえ、昔のジョークを蒸し返すのにわざわざ徒歩でヒンドゥークシユ山脈を超えて来たわけじゃないだろう」

「質問があるのは俺じゃない、この若いのだ」

アメリカを思い出させる味のせいか、糖分と水分のおかげか。冷えたペプシを一口すると、気分が落ち着いた気がした。ジェイクは深く息を吐くと、口を開いた。

「我々はある潜水艦の行方を追っています」

「君たちが奇妙にも〈タイフーン〉と呼んでいる、941〈アクーラ〉設計戦略任務重ロケット潜水巡洋艦のことかな」

「そうだ。こいつが言うには、その最新型の一隻が核弾頭を積んだままあなたたちの管理下を離れたということだが」

「ふむ……」

ミハエリスはしばらく顎を撫でていたが、やがてギブズの方を見てにつこりと笑みを浮かべた。

「知っていることは話せるが、タダでというわけにもいかないな」

「こいつでどうだ」

「わかっているじゃないか、同志」

ギブズが足元に置いていたバックパックからマルポロを一箱テーブルの上に置くと、ミハエリスはいそいそと封を切った。

「……それで？」

「問題のフネ、〈ジカーブリスト〉は艦娘じゃないかというのが我々の仮説だ」

ミハエリスはマッチを擦って煙草に火をつけると、満足しきったネコのように目を細めて煙をくゆらし、頷いた。

「その通りだ。計画番号プロジェクト941.5、艦番号TK5201〈ジカーブリスト〉は艦娘として建造された」

「なぜそんなことを？」

「考えてもみたまえ」

火のついたままのマルポロを口から離すと、学生に講義する教授のような口調でミハエリスは続けた。

「自律行動が可能で、在来艦艇からは探知も攻撃も不可能な艦娘。それに核打撃力を持たせる。アメリカの海軍力に追いつく事を悲願とし、そのためには自分の母親だろうが姉妹だろうが売ることさえいとわれないソ連海軍にとっては夢のような存在だ」

「だが制御不可能になった」

「またまたその通りだ」

ミハエリスは芝居がかって悲しげに首を振った。

「予定では、ノバヤゼムリヤ沖からカムチャツカに向けて核ミサイルの実射適合試験を行うはずだった。搭載する核ミサイルも新開発の、地中貫通能力を高めた強化弾頭だ。だが出航してしばらくのち、消息を絶った」

「搭載しているのは模擬弾頭だけだったのか？」

「試験用の模擬弾頭は一基だけだ。実射試験を行った後は、航行中のメンテナンスと放射性物質の管理試験を行う予定で、あとの十九発は実弾頭を搭載していた」

「あんたはこの計画にどの程度関与していたんだ？」

「最初からね」

「……情報勤務から外されてアフガンに回されたのもそれが理由か。スベツナズはGRUの中じゃ出世コースから外れるからな」

答えずに、ミハエリスは肩をすくめた。

「ジェイク」

「はい」

半ば蚊帳の外に置かれながら、ギブズがミハエリスから引き出す情報に耳を傾けていたジェイクは、名前を呼ばれてびくと肩を震わせた。

「お前さんのほうから質問はないのか？」

「……現在の〈ジカーブリスト〉は核攻撃能力を持っているんですか？」

「持っているともいえるし、持っていないともいえる。核弾頭そのものは搭載されているが、試験航海に当たっては、艦長も政治将校も発射キーを持たされてはいなかった」

物思いにふけるようにミハエリスは背中を椅子にもたれ、煙を吐き出した。

「今頃は誰も生きてはいないだろうがな」

ジカーブリストが消息を絶つてから、通常のパトロール期間を大幅に超えた時間が経過している。水と酸素は原子炉から作り出せるとしても、食料はどうにもならない。秩序を守って餓死するか、食料を巡って殺し合いをしたか。

「沈んだとは考えていないんだな」

「破壊されたという確証があるまでは、存在しているものとして考えねばならない」

「厄介だな」

「……お互いにな」

ミハエリスはフィルターぎりぎりまで吸い付けたマルボロを灰皿の上でもみ消し、天を仰いだ。

「海上、空中、水中……手を尽くして探してはいるものの、今のところ消息に関する有力な情報は得られていないのが実情だ。まさにそれを狙って艦娘を核武装させたわけだからね」

「……同じ艦娘同士なら、あるいは」

ギブズが独り言ちるようにつぶやいたのを、ミハエリスは聞き逃さなかった。

「そう。もし艦娘を人間の指揮下で運用することができたら、ジャークプリストを発見し、撃沈できるかもしれない。艦娘に対抗する艦娘か。いや、なかなかいい発想だ。だがもし人類の側について艦娘と戦う艦娘がいたしたら混乱が生じるのではないかね？」

「どういう意味だ？」

「人類の敵となり、人類を海から追い出そうとする艦娘。そして人類を守り、人類の生命線たる海上交通を守る艦娘その二つは別のカテゴリーとして区別したほうがいいのでは？」

「或いは今まで我々が〈艦娘〉と呼んでいたものに、別の名前を与えるか、だな」

「ふむ」

ミハエリスは紙ナブキンを一枚テーブルに広げると、指先をストリチナヤの表面に付いた露で濡らした。

「深海に棲み、人間を襲う鬼……」

デーモン
アビス・ドゥエラー
「深海棲艦」

ぼつりと、その言葉が口をついて出た。ミハエリスが指先で書いていた文字を眺めていた二人が、同時にジェイクの方を見る。

「いえ、なんとなく思いついただけで」

「ふむ。深海棲艦……悪くないんじゃないか。この若者はなかなか良いセンスをしている」

「あんたみたいな古強者にかかっちゃ形無しだよ。おかげで俺が子守りについてくるはめになった」

不肖の息子を褒められた父親、といった風に、ギブズは手のひらを天井に向けて肩をすくめ、そしてミハエリスの方に向き直る。

「それで、ソ連軍は問題の潜水艦を追尾できていないといったな」

「ああ」

「ソ連軍には行方がつかめなくても、あんたには心当たりがあるんじゃないのか」

「……」

ミハエリスは無言でバックから二本目を取り出し、啜えた。

「例えば、ジカーブリストを捜索することが可能な、別の艦娘とか」

「心当たりがないわけでもないな」

浮かべていた笑みを消し、マツチをする。煙を吐き出したときには、また余裕めいた笑みを浮かべていた。

「だがこれは私の切り札だ。マルボロひと箱で売り渡すわけにはいかないな」

「何が欲しい？」

「情報には情報だ」

口の端から煙を吐き出しながら、ミハエリスはギブズの顔を見た。口元は笑っていたが、笑みは目まで届いていない。

「今朝から第四〇軍ぜんたいが上を下への大騒ぎでね」

「そのようだな」

「撃墜された機は任期を終えて故郷に帰る徴集兵を満載していた。生存者は一人もいない。ようやくクソな戦場もクソな軍隊も離れて故郷へ帰ろうという段になって命を奪われる。その気持ちが想像できるかね？」

「さあな。見当もつかない」

ギブズはかぶりを振った。

「戦地において故郷が恋しいと思ったことはない。ベトナムにいた頃の俺は幸せだった。1975年にタンソニユットでNVAを迎えたときもそうだ。海兵隊の連中、嫌がる俺をへりに載せるのに殴り倒して鎮静剤まで打つ羽目になった」
「みんながみんな君のように天職につけるわけではないからな。話を戻すが、私が見るところ件のミサイル攻撃には君たちがかわっているんだろう？」

「おたくらの連中が武器庫からアヘン欲しさにミサイルを横流ししたんじゃないのか？ あんたたちにだって携行対空ミサイルくらいあるだろう」

「攻撃は払暁で、推測される攻撃位置からして機体は太陽を背にしていた。わが方の〈ストレラ〉なら太陽か山肌か、明後日の方に飛んでいくのが関の山だ。どうにかして〈ステインガー〉を持ち込んだんだろう？ そしてステインガーの操作方法を知っているアメリカ海軍特殊戦がCIA要員を伴ってカプールにやってきた。これを偶然と片付けるほどヤキが回ってはいないよ」

昨晩別れたあのムジャヒディンたちの顔が思い浮かんだが、ギブズは表情には出さなかった。

「どうだね。今回の攻撃に関する有力な情報が入手できれば私の立場も改善する」

「……たとえば〈ステインガー〉の実物とか？」

「ソ連邦英雄ものだな」

ミハエリスは大仰に頷いて見せた。

「受けるも受けないも君たち次第の取引だ。アメリカは自由の国、そして資本主義の国だろう」

腕を組んでいたギブズはじつとミハエリスの目をのぞき込み、やがて肩をすくめた。

「いいだろう。俺たちと一緒に国境を越えた武器のありかを教える」

「中佐！」

とつさにジェイクは立ち上がり、テーブルを叩いた。

「ステインガーを引き渡すんですか？」

「何をしに来たか思い出せ、ジェイク」

動揺した素振りもなく、ギブズは目線でジェイクに座るよう促した。朝の攻撃で使われたミサイルは二基。ジェイクは詳細な行き先を聞かされていないが、昨晚別れてパンジシールのマストド派に向けて運ばれていった荷物がそれとは別にある。それを引き渡すということは、彼らの居場所も教えるということだ。

「核発射能力を持つ艦娘の居所をつかみ、無力化する。それが俺たちの仕事だ」

「取引成立ということでもいいのかな」

「ああ」

ミハエリスはにやりと笑って頷いた。

「かといって、直接君たちの欲しい情報を提供できるわけではないのだがね」

「勿体ぶるなよ」

「……カイル・ラザラスという男を探せ」

「何者だ？」

「ラングレーの記録を探せば見つかるはずだ。そしてウィラード、君なら会えばわかるだろう」

ギブズはジェイクと顔を見合わせた。お互いにその名前に聞き覚えはなかった。ミハエリスはテーブルの上に手を組み、身を乗り出した。

「さて、取引は取引だ——」

ミハエリスが言いかけたとき、店の前で軍用トラックが停まった。

「全員その場を動くな！」

AK74で武装した兵士の一団がどかどかと砂埃を立てながら店の中になだれ込み、ジェイクたちの座っているテーブルを取り囲んだ。

「アメリカ人だな」

兵士たちの後から入ってきた男が、ギブズの方を見た。ミハエリスと同じ仕立てだがカーキ単色の野戦服に正帽をかぶり、革の将校用ブーツを履いている。英語だったが、ミハエリスほど流暢ではなかった。鼻にかかるような訛りがあつた。

「邪魔をしないでくれないかな、同志少佐」

ミハエリスはKGBの階級章をちらりと横目に一瞥しただけで、あとは存在していないかのようにギブズたちの方を向いていた。

「彼らは私の情報源だ。わざわざ危険を冒して接触しに来てくれた、な。君たちは私の任務を妨害しているぞ、同志」

「なにが任務だ。今朝の事件を知っているだろう。カプールの保安は我々の管轄だ」

KGB将校は、居丈高に階級が上のはずのミハエリスに詰め寄っていた。

「……揉めているようです」

ロシア語で話していたので、ジェイクは小声でギブズに耳打ちし、通訳した。ギブズは不意に笑みが浮かんでくるのを覚えた。どこの国でも軍と情報機関は折り合いが悪いらしい。文化が異なっても変わらない人間の営みを眺めているのは愉快だった。

「ステインガ―のありかなら、今向こうから話してくれるところだったんだがな」

「必要ない。こちらで聞き出す」

「手荒なことをしないでくれないか。スターリンの時代とは違うんだぞ」

チェキストめ、とミハエリスが珍しく苦々しさを露わに吐き捨てる。兵士たちは構わずにアメリカ人を立ち上げらせると後ろ手に手錠をかけ、頭から布袋をかぶせた。

1986年2月2日 アフガニスタン人民共和国 カブール北東のどこか

ジェイクはBTR装甲車の簡易座席の上で身じろぎした。穴だらけの幹線道路の上でタイヤが跳ねるたびに、頭がぐくぐくと揺れる。KGBに拘束されてから一昼夜。上着もブーツも脱がされていたので、手足が冷え切っていた。今どあたりを走っているのだろうか。窓に覆いがかけられているので、外の様子はまだわからなかったが、漏れてくる光からまだ明るいのは分かった。時間の間隔も失われていたが、出発したのは夜が明けてからだだった。日の出の時間、BTの航続距離、走行速度から目算をつける。カブールから二〇〇マイルくらいだろうか。

目隠しがないのがありがたかった。頭に袋をかぶせられていた間、ろくでもない光景ばかりが浮かんでいた。眼球が破裂するまで殴られ、手の皮をはがれ、火傷させられ、自白調書にサインしては処刑室に消えていく粛清の犠牲者たち。軍法廷に引きずり出されるU・2機のパイロット。シベリアか北極圏か、食べるものにも事欠く労働矯正収容所での過酷な生活。少なくとも、今のところはそこまでひどい目に遭ってはいない。KGBの連中は、生きたまま二人をどこかへ連れていくつもりだった。問題はどこに連れていくか、だ。

「バグラムの空軍基地ならもう着いてる頃だ」

背もたれに背中を預けて目を閉じていたギブズが、眠たそうな声でささやいた。

「ずっと北に向かってる。このままアムダリヤ川を渡って陸路でソ連領内まで連れていく気だろう」

不安げなジェイクとは対照的にギブズはくつろいでいた。ジェイクの方に首を傾けて、小声でささやく。

「飛行機には乗せないつもりだ。よほどステインガーが怖いんだろうな」

その言葉に反応したのか、車内の二人を監視していた兵士が体を起こすと、ロシア語で何か喚きながら小銃を振り上げ、鋼管のストックでギブズの肩を殴った。

「何と言っている？」

「あの飛行機には百人の戦友が乗っていた、と」

再び、今度はむこうずねを狙って、兵士はギブズを銃のストックで殴った。

「……しゃべるな、黙っている、と」

言われたとおりにした。生存・脱出訓練で教えられた通り、痛みに呻き、疲れ切っている消耗している様子を見せながら、自分の席に戻っていく兵士を目で追っていた。疲労と空腹に関しては演技するまでもなかったが。

キャビンに居るのは二人の捕虜とそれを見張る兵士一人。これが車長だろう。帽子の代わりに頭に布のバンダナを巻

き、胸元からは縞模様の水兵シャツが覗いていた。あとは運転手と砲塔から脚だけ覗かせている砲手。残りは車体上面に座って脚をぶらぶらさせていた。装備に裁量があるスベツナズらしく、編み上げの空挺靴に合成皮革のジャックブーツ、中にはアデイダスの模様入りスニーカーとバリエーションに富んでいた。

せつかくの装甲車なのにキャビンに乗らないのは地雷が怖いからだろう。そんなところまでベトナムそっくりだ、と類似性を見出している自分にギブズはくぐもった笑いを漏らす。ベトナムは蒸し暑く、アフガンは乾燥している。違いはそれだけだ。

装甲車が急停車し、顔をうつむかせていた二人は頭を前の座席にぶつけた。

「スーカ！」

「アゴーニ！　ダワイダワイダワイ！」

爆発音。ロシア語の怒号が飛び交い、兵士たちが装甲車の天井から飛び降りて散開していく。砲塔が旋回し、砲手がどこかへ向けて重機関銃を発砲する。M2に似ているが、もっと重い音だった。どこかから撃ち込まれる銃弾が車体装甲に当たって、耳障りな音を立てた。腰を浮かしかけたギブズに、車内に残っていた兵士が銃を向ける。言葉はわからないが、その怒気をはらんだ目つきで意図は分かった。その背後、汚れた窓ガラスの向こうから、車列の前にいたトラックが猛烈な勢いでバックするのが見えた。

衝突を予期していたのはギブズだけだった、RPGの着弾をよけようとバックギアに入れたトラックは、結局避けきれずに被弾し、炎上しながらBTRに尻からぶち当たった。爆発と衝突の衝撃で装甲車は斜めにかしぎ、体勢を崩した兵士にギブズは頭からとびかかった。

「ジェイク！」

もんどりうって絡み合いながら、ギブズが怒鳴る。

「こいつの銃を奪え！」

ギブズに押し倒されながら、兵士が銃のトリガーに指をかける。AKが男の手の中で火を噴きながら跳ねまわり、跳弾がキャビンを跳ねまわる。とっさに身をすくめたジェイクが目を開けると、運転手と砲手の体が血を流して崩れ落ちていく中、ギブズは兵士の体をキャビンの壁に押し付けていた。銃は排莖口に莖莖を嘔みこんだまま、男の手を離れて転がっていた。

「早くしろ！ 撃て！」

後ろ手に手銃をかけられたまま、ジェイクは銃に駆け寄り、煙を上げてそれを手探りで握った。壁の突起にひっかけるようにしてボルトハンドルを押すと、排莖口に詰まっていた莖莖が転がりおち、莖室に弾が送られた。

「撃てません！」

兵士が腰のナイフを抜こうとするのを、ギブズは膝で必死に押さえつけていた。

「中佐に当たりますす！」

まともな状況でも、ギブズを外して兵士だけを撃つのは難しいだろう。曲芸撃ちのガンマンめいて背中に回した手に銃を握っていればなおさらだ。

「構うか！ 撃て！」

「無理ですッ！」

「くそっ」

吐き捨てると、ギブズは口を開け、壁際に押し付けた男の喉笛に歯を立てた。兵士は信じられないものを見るように目を丸くしていたが、やがてひゅーひゅーと壊れた笛のような息を漏らして、その体がだらりと崩れ落ちる。気管が碎かれていた。

「……大丈夫か？」

「え、ええ……」

車内が静まり返ると、ギブズは腕から脚を抜いて手を前に出し、ギブズに手を貸して立たせた。外からの銃撃もいつのまにか止んでいた。

「すみません」

「気にするな」

それだけ言うとギブズは死んだ兵士の体を探ってカギを見つけると、手錠を外した。

「貸せ」

銃を受け取ると、喉笛を噛み砕かれて横たわる兵士の首筋を撃った。男はビクンとはね、それきりもう動かなかつた。血の染みがゆっくりと車室の床に広がっていった。

なにに対して謝罪したのだろうか、とジェイクはぼんやりと考えた。目の前で人が死ぬのも、人が人を殺すのも初めてだった。ギブズは表情一つ変えるでもなく、男の装備を漁って新しい弾倉を銃に填めていた。ギブズに当たるから撃てなかった。本当にそうだろうか？

車の外で、人の気配がした。

「通じるといいんだがな」

ギブズは折り畳み式ストックの鋼管の間に挟んであった止血帯を解くと、銃に巻き付けて開いたままのハッチから突き出した。

「アフガン語で言ってくれ、『アメリカ人だ、撃つな』だ」

「外にいろのがソ連兵だったら？」

「ロシア語で同じことを言え」

ジェイクがウルドゥー語で叫ぶと、イギリス風の英語が怒鳴り返してきた。

「アメリカ人か？」

車外の様子は酸鼻を極めていた。ジェイクとギブズが乗っていたのは、鉄板と銃座で補強したトラックを前後から装甲車で囲んだコンボイの最後尾だった。他の車両はすべて燃え上がっていた。あたりはディーゼル燃料が燃える刺激臭と、傷みかけた豚肉を焼いたときのような臭いが満ちていた。人が焼ける匂いだ。

「……ミハエリスが手を回したんだろう」

「え？」

負傷者を手当し、焼け残った物資を集めるムジャヒディンたちから離れて、ギブズはぼつりとつぶやいた。

「GRUがムジャヒディンに情報を流したっていうんですか？」

「でなかったら俺たちも丸焼けだろうさ」

「なぜそんなことを？」

はあ、とため息をついて、ギブズは天を仰いだ。

「お前それでもCIAか？　本当はラングレーからじゃなくボーイスカウト連盟から派遣されてきたってゲロるなら今のうちだぞ」

「しかし、そこまでの理由が……」

「俺たちをKGBに渡すのは避けたかったんだろう」

「なぜでしょうか？」

「なぜなぜ。疑問は深まるばかりだな」

ジェイクの無知を咎めるように、ギブズは肩をすくめた。ギブズにもそこまではわからなかった。転がっていた死体を検分して、サイズの合いそうなものを選ぶと靴を履き替えた。

「客人」

炎上する車列から離れて立っているヨーロッパ人を認めると、先ほどジェイクに英語で答えたムジャヒディンがやって来た。その英語を話すムジャヒディンは、マスタードの副官の一人だ、とだけ自己紹介した。アフガンの荒野よりもオックスフォードあたりの由緒ある学生寮のほうが似合いそうなしゃべり方だったが、部隊の中で一番いい銃と無線機を持っていた。

「あれがサラン峠だ」

男は幹線道路がずっと続いていく先、白く雪をかぶった山を指さした。予想した通り、カプールから陸路でずっと北に向かっていたらしい。冬のサラン峠は戦争がなくても難所だ、運がよかったな、と男は笑った。

「助かったよ。シャー・マスードに礼を伝えてくれ」

「……あなた方は我々を助けに来た。当然のことだ。我々の名誉にかけて、無事に故国へ送り返さなければならない。それに……」

男は土ぼこりを立てながら、荒野を突っ切って近づいてくるピックアップトラックの車列に目をやった。

「礼なら直接言うといい」

二人のすぐ近くで停まったピックアップトラックには見覚えがあった。カプール郊外でバンジール行の荷物を載せて別れた、同じ南日本製のトヨタだった。

「アメリカ人か？」

「ああ」

トラックの助手席から降りてきた男は、そういうと微笑みながらギブズの方に手を差し出した。訛りはあるが正確で流暢な英語だった。

「アフメドだ」

「ウィラード、それにジェイコブだ」

「わざわざ我々のために遠いところから、感謝している」

「これが我々の任務だからな」

シャー・マスードは力強く、順番に二人の手を握ると、人懐こい笑顔を浮かべた。アフガンで最もソ連に恐れられているムジャヒディンの指揮官が自分の目をのぞき込んでいる。ジェイクにはどこか非現実的な光景に思われた。資料ではギブズよりは若く、ジェイクよりは年上の筈だが、過酷な気候と戦塵にさらされた顔には深くしわが刻まれている。その目には知的な好奇心の輝きがあった。

「我々が持ち込んだ武器は無事渡ったようだな」

「見てみるか？」

トラックの荷台には、ロバのキャラバンから積みかえた荷物がまた積まれていた。マスードは木箱のひとつを開けると、中身を一つ取り出した。

「……見てみる」

「これは……」

マスードからギブズへ、そしてジェイクへと順繰りに手渡されてきたのは、堅い装丁の本だった。

「そうだ。それが我々の武器だ」

ばらばらと中身をめくる。ロシア語、タジク語、そして正典のアラビア語で印刷されたクルアーンだった。

「あの不信心者たちに勝利するためのな」

「……荷物の中身、知っていたんですね」

聖典をマスードに返すと、ジェイクは恨めしげな声でギブズに耳打ちした。

「俺は『ステインガーのありかを教える』とは言わなかったぞ。よくそんなことでCIAなんかやってられるな」

北部国境を超えて、ソ連領に持ち込むのだろう。タジキスタン、ウズベキスタンに民族主義とイスラムが持ち込まれ、赤い帝国をその下腹から蚕食する。非の打ち所のない計画のように思われたが、ジェイクは心のどこかで不安を覚えていた。ソ連を滅ぼすために民族主義と宗教を煽り、そしてもしソ連が滅びたら？ 部族も主義主張もバラバラなムジャヒディンと人民政府の残党が内戦をはじめ、ことによってはアメリカの兵士が、このアフガニスタンの荒野で戦うことになる……。

「助けてくれ」

ジェイクの不穏な想像は、力なく助けを呼ぶロシア語の声で中断された。

「アメリカ人か？ ……助けてくれ……殺さないよう、こいつらに言ってくれ。なんでも喋る」

靴と上着を脱がされ、顔に乾いた血をこびりつかせながら跪いているソ連軍捕虜。ロシア本国かバルト海沿岸かわかわらないが、明らかにヨーロッパ系とわかる金髪の若い兵士だった。その捕虜はマズードと話しているヨーロッパ人に気付いて、小声で助けを求めている。傍らに立っていたムジャヒディンが長いナイフの柄で殴りつけると声はやんだが、視線はじつとジェイクの方を見ていた。

「……見るな」

ギブズに促されて、ジェイクは捕虜に背を向ける。しかしその色素の薄い目は、残像となってしばらく臉の裏に残っていた。

サルヴェイジョン・ネイヴィー

1

1986年3月14日 オーストラリア・シドニー、ノースシドニー・カウンシル

南半球に穏やかな秋が訪れ、シドニーは暖かく晴れていた。ニュートラル・ベイを望むカフェのテラス席からは、ハーバー・ブリッジと対岸のオペラハウスの偉容が一望できた。絵葉書のように美しい光景だったが、カイル・ラザラスの心は晴れなかった。会合相手は現れなかった。追加の指示もない。焦る素振りを見せてはいけないことはわかっていたが、視線はつつい腕時計とカップを往復してしまう。

定期報告はキャンセルだ。震えそうになるのを押さえてカップに残ったカフェラテを飲み干すと、代金をテーブルに置いて店を出た。

カフェで談笑していたカップル。カメラをぶら下げた観光客。誰もかれもが自分を監視しているように感じる。シド

ニーの日差しは秋を迎え始めても暖かく、みな半袖で過ごしていたが、カイルの胃の奥には何か冷たいものがのしかかっていた。

「ハロー？」

シティレイルの駅に向かって歩く途上。北日本製のカメラをぶら下げた若いカップルがカイルの前を塞ぐように立った。

「すみません、この先に『テルマ・アンド・ルイズ』という店があると聞いたんですが……」

カップルの男の方が、観光ガイドブックを手にカイルの方に歩み寄ってくる。面倒な、と思いながら、やり過ごすために男が差し出したガイドブックのページに目を送る。英語だが、ヨーロッパの訛りがあった。「ハロー」のHが脱落して半ば「アロー」に聞こえる……フランス人だ。

さあっと耳から血の気が引く。カイルはとっさに身を離そうとするが、男はガイドブックをその顔に押し付けて視界を塞いだ。

「早くしろ！」

今度ははっきりとフランス語で叫んだ。カイルの背後に回った女の方が腰のベルトを引き上げ、二人がかりで抱え上げる。タイヤを軋ませながら車が路地を駆けこんでくるのが聞こえた。

カイルが押し込まれたのはトヨタの配達用バンだった。

「バスポートはどこだ？」

カッブルが両脇からカイルの体を抱えて薄暗い車内に押し込むと、中で待機していた男がドアを閉めた。

「ベストの内ポケットだ」

男がうなずくと同時に、耳障りなスキル音を立ててバンは発進した。男がフォトグラファー・ベストのポケットを漁る間、カッブルの男女が左右からがっちりカイルを押さえつけていた。さっきまでの張りつけた微笑みは消え、目に敵意がにじんでいた。

「エト・ヴー・フランセ？」

「ダー」

男はバスポートを見つけると、写真とカイルの顔を見比べた。カイルのフランス語の問いかけに、ロシア語で返してきたその男がチームの指揮官らしかった。年のころは四〇代くらいで、白いものが混じり始めた髪を外人部隊風に短く刈っていた。がっしりとした軍人らしい体をしていた。

「カイル・ラザラス。ふむ。余り写真写りは良くないな。肖像写真は苦手らしい」

「僕をどうする気だ」

「ぜんぶ喋ってもらおう」

しらを切ってはみたが、覚悟を決めるしかなかった。フランス人はどうやって自分の正体を暴き出したのだろう。車は高速道路に入り、ハーバー・ブリッジを南に向かっていた。フランス領事館の方角だ。

「そのあとであればお前を解放してやってもいい」

「何のことだ。僕に何かあれば仲間たちが黙っていないぞ」

「その仲間たちがお前の正体を知れば、なんといふかな」

ハーバー・ブリッジを渡り、カーヒルモーターウェイから一般道に降りると、車はヨーク・ストリートの高級ホテルやブティックが立ち並ぶ一角を、制限速度を守って進んでいた。フランス領事館はすぐそこだ。

買い物を楽しむ観光客や家族連れ。ガラスの向こうを過ぎ去っていく、暖かい陽光の中で笑う人々が、まるで宇宙船の窓から見ているかのように遠い世界のように思えた。

あの子には、もう会えないのか。カイルがぎゅつと目を閉じた瞬間、道路脇に停車していたピックアップトラックがバックでバンに突っ込んできた。

ギブズはフォード製ビックアップの運転席から降りると、胸に押し付けるようにして拳銃を構えながら、遠回りにラジエーターから煙を上げているトヨタの後ろに回った。頑丈なフォードの方は後部バンパーと荷台がへこんだだけで済んでいたが、トヨタは助手席前方の外板が大きく凹み、赤茶けたオイルが漏れ出して血だまりのように路面に広がっていた。

「よし、動くなよ」

中にいる人間に体を晒さないように、車体に身を隠しながら後部ハッチを開ける。真っ暗な車内にまばゆい光が差し込みむ。中にいる人間には逆光になっているが、銃を持っているのは見えるはずだ。

「来い。カイル・ラザラス」

「あなたは……」

カイルは眩しそうに目を細めていたが、闖入者の正体に気付くと、わずかに表情を緩めた。

「待て……っ!!」

車内から飛び出すカイルを撃とうとしたのか、それともギブズを撃つつもりだったのか。フランス情報部員が銃を抜くよりも、ギブズがトリガーを引く方が早かった。イングラム短機関銃の短連射がフロントガラスを砕き、男は取り出しかけたベレッタを落として手を上げた。交通事故の様子を見て集まってきた野次馬が、銃声に気付いて悲鳴を上げ

る。

「死人は出したくない。お互い面倒だからな。フランス領事館はすぐそこだ、行け。それとも女王陛下下のオーストラリア警察が来るのを待つのか？」

「ぐっ……」

ギブズはハッチを閉めると、カイルをピックアップの後部座席に押し込み、運転席で待機していたジェイクの背中を蹴っ飛ばして発進させた。

在シドニーアメリカ領事館の地下。盗聴防止のためにアクリル板とファラデーケージで二重に囲われた電波遮蔽室の中は息苦しく、蒸し暑かった。

「……カイル・ラザラス」

ギブズはジェイクを伴って室内に入ると、取調室のようなテーブルの前に座っていたカイルの前に資料を広げた。アファンから戻ってすぐ、CIA、NSA、FBIに照合して集めた資料だった。

「1950年生まれ。職業、写真家。親の代からの共産党の家庭に生まれ、大学卒業後はジャーナリストを志望。現在は環境運動・平和運動を精力的に取材……ニューズウィークに虹の戦士号の同乗取材記事が出たことがあったな」

「……読んでくれましたか？」

カイルは曖昧に笑った。ギブズの顔を見たときの、懐かしさと高揚感は薄れ始めていた。アメリカの保護下にいたとしても、今の自分の苦境には変わらない。もともと自分がアメリカのパスポートを持っている事を考えれば、皮肉なものだ。

「ああ。ぜんぶ嘘っぱちだ」

「この男を知っているんですか、中佐？」

「……まあな」

ギブズは、机の上で開かれたカイルのパスポートを指で撫でた。そこに載っていた写真は、ギブズが知っていた顔だった。

「キリール・シードロヴィチ・ラズーモフ。元KGBだ」

「元ではありませんよ」

カイル……キリールは、力なく首を振った。十五年という歳月以上に、心労がかつての若者を老け込ませ、やつれてこけた顔は何処か浮世離れた厭世観を匂わせていた。

「今もKGBのために働いています」

「……GRUの次はKGBですか？」

ジェイクは肩をすくめた。いつの間にか、ギブズの過去をほじくり返すたびに出てくる因縁話にいちいち驚きもしくなっていた。潜水艦を追って手掛かりを探すたびに、十五年前の瑞鶴暗殺作戦に係ったなにかが顔を出す。

「中佐の交友範囲はずいぶんお広いですね」

「そのせいで助かってるんだから当てこすりはやめろ。おかげで今やCIAと一緒に働くはめになってるんだ」

ギブズとジェイクの掛け合いをほほえましく眺めながら、キリールは再び力のない笑みを浮かべた。曖昧な生活を送っているうちに習性になった、曖昧な笑み。キリール・シードロヴィチ・ラズーモフ。その名前は瑞鶴暗殺作戦の機密報告書に出てきていた。同じ目的のために北センチュリオン島に派遣され、やがて瑞鶴——河津大佐に共感して祖国を捨てた男。「艦娘」の記録者。

「……お元氣そうで何よりです。ミスタ・ギブズ」

「お互いにな。それより、北センチュリオン島にいたはずのお前さんがシドニーで何をしている」

キリールは横目で不安そうにジェイクの方を見た。

「……こいつのことなら心配しなくていい。どうせ一から十まで聞いたところで頓珍漢なことしか言わないからな」

ジェイクは不服な顔を浮かべていたが、キリールが話し始めたので口を閉じていた。

「僕の任務は、N A T O 諸国に対する平和運動、特に反核兵器・反核実験活動を監視し、可能であればそれを扇動することでした」

「グリーンピースか」

「はい。〈虹の戦士〉レイシボウウキョリナーが破壊されたとき、僕も船団に加わっていました」

それでフランス人がキリールを追っていた理由が分かった。太平洋での核実験に反対するためにニュージーランドにきていたグリーンピースの船舶がフランス対外情報部トウゴウチョウバウの水中工作員に爆破され、死人を出したのは昨年のことだった。民間船舶を西側政府が爆破するという異例の事態だったが最終的にミッテラン政権は関与を認め、国内外から突き上げを食らいながらもしぶとくニュージーランドと事件の收拾について交渉している最中だった。

「……フランス側は、グリーンピース内部にソ連スパイがいて、核実験の情報を得ようとしていると主張していました」

ジェイクが口を挟むと、ギブズはうなずいた。

「実際にK G B が浸透していたとなれば話は全く変わってくる。エリゼ宮も躍りになって身柄を抑えようとするわけだ」

「……ええ」キリールは目を伏せた。「そして、グリーンピースの連中も僕の偽装に気付き始めています。今や、彼ら

にとつても厄介者です。結局、僕は工作員としてはあまり優秀ではなかったということでしょうね」

「同情するよ」

外国のエージェントに追われながら、仲間を欺き続ける生活。偽装と欺瞞に満ちた、誰も信用できない日々が、キリールの顔に深く皺を刻んでいた。アメリカ人とはいえ、自分の正体を偽らず話せるギブズに会ったことで、ようやくキリールは目にかつての快活さを取り戻しつつあるようにも見えた。

「だが肝心のところを聞いていない」

ギブズはキリールのパスポートを開いたまま、机の上に滑らせる。パスポートそのものは偽造ではなく、アメリカ国内で発見された正規のものであることは国務省に照合済みだ。身元そのものがアメリカ国内にソ連が構築した偽装網で念入りに組み立てられたものだった。スペイン内戦の時代、国際旅団に参加したアメリカ人から取り上げたパスポートで作った、古く根深い偽装だ。

「祖国を捨てて島で暮らしていたあなたが、なぜKGBのために働いている？」

「島での生活は、楽園ではなかったということです」

誰かがその質問をするのをずっと待っていて——その答え方もずっと準備していた。そういう口ぶりだった。

「ぼくには娘がいます。あなたと瑞鶴が島を去ってから、しばらくして生まれた子です」

「その子の母親は？」

「フブキです」

苦い思い出がよみがえる。北センチュリオン島で瑞鶴が育成していた艦娘の一人。ギブズの乗っていた魚雷艇の乗組員、ジム・クラークを殺したのは彼女だった。

「彼女はジムを殺したんだぞ」

「あなただって瑞鶴を殺したじゃないですか」

淡々と、キリールは反論した。

「戦場で人を殺したとしても、悪い人間だとは限りません。人を愛せないわけではない筈です」

「……続けてくれ」

「数年間は平穏でした。でもある日、私は見たんです」

キリールは、そこで言葉を切った。

「……海の上を滑るように歩いている娘を。その瞬間私は思いました。この子を艦娘にするわけにはいかないと」

「それで、島を離れた？」

「はい。母親には告げずに、隠しておいたボートで島を出ました」歪めた口元に罪悪感がにじんでいた。「島の生活し

か知らないあの子に、外の世界を見せてあげたかったというのもありました。僕が知っている世界を」

かつての理想主義と、子供を持つことで生まれた責任感の間で苦悩する父親の顔だった。

「インドか、タイに向かうつもりでした。或いは、ミスタ・ヴァーロックのところに身を寄せようかと。けれど海流に流されて漂流し、脱水で衰弱しきった僕らを救助したのはベトナム軍でした」

「それでソ連に？」

「はい」

キリールはぐつと奥歯を噛み締めた。

「ベトナム人は僕らをカムラン湾のソ連軍基地へ連れていき、そこで僕は娘と引き離されました」

「……ロシア人のやりそうなことだ。おっと、失礼」

「いいんです」

キリールはゆっくりとかぶり振った。

「それで、あなたの娘は艦娘の研究材料として連れていかれ、あなたは娘の安全と引き換えにKGBの現場工作に復帰するよう迫られた。そんなところか」

「はい」

ギブズは腕を組み、しばし狭い部屋の中から意識を遊離させて考え込んでいた。やがて、口を開いた。

「娘はどこにいる？」

「ウラジオストクです」

正確を期すために言い直した。

「ウラジオストクにいるとまでは聞かされています。ウラジオストク沖の小さな島の一つに研究施設があるはずで

そこにいると思います……おそらく」

「もしかして、カラムジン島ですか？」

再び横合いからジェイクが口を挟んだ。

「知っているんですか？」

「ウラジオストク軍港の閉鎖行政区域に含まれる島で、日露戦争の頃に建てられた海上要塞があります。確か……イエ

フゲニー要塞とか」

「そうです、そうです」

ジェイクは頭の中でウラジオストク軍港周辺のソ連海軍演習地区に関する情報を描き出す。ナホトカに向かう民間航路から身を隠すように建てられた古い要塞。結局日本海軍の襲撃には間に合わず、ウラジオストク港の防備拠点とし

ては放棄されていたものだ。

「第二次世界大戦前まで生物化学兵器の研究拠点として使われていて、現在は演習時の物資倉庫になっている筈ですが」

「違います。要塞は今も研究所として使われています。あの子がいるとすればそこです」

「キリール」

顎を撫でながら話を聞いていたギブズが口を開いた。

「フランス側はお前さんを押さえそこなったことを自分から認めはしない筈だ。だから、今お前がアメリカの保護下にいることはKGBに知られていない……知られていない可能性は高い」

「中佐、まさか？」

「あなたの娘を救出するなら今だ」

「本気で言っているんですか？」

「……俺たちのもともとの目的はそうだろう。キリール？」

キリールは目を上げてギブズの方を見た。無言だったが、既に目は決意を固めていた。

「俺たちは今とある艦娘を追っている。そのために、あなたの娘……艦娘が必要だ。だが協力してくれれば、そのあと

は親子二人、アメリカで新しい暮らしを始められる。ここにいるこの男はCIAだ。こいつが保証する」

「ああ……もう……」

アフガニスタン行きですら、調整に2か月もかかったのに。行くまでが面倒なら帰って来たあとも面倒だった。そしてその次には、警戒厳重なソ連海軍の拠点に潜入する算段に付き合わされている。ラングレーの決定を待たずに実行して、間に合わなければ事後承諾を取るしかない。ため息が漏れた。ギブズのやり方はめちゃくちゃだが、いつの間にかそれに付き合っって具体的なプランを立てている自分にも腹が立った。

「少人数で、迅速に実行する必要がある。俺は行く。お前さんは？」

「行きます。内部のことならある程度分かります。それに……ぼくは父親ですから」

「同じソ連人を撃つことになるかもしれない、わかっているな」

「はい」

是非もなくキリールが頷くと、二組の視線がジェイクの方を見た。

「……行きますよ」

それで話は決まった。

「最後に質問だ、キリール」

「はい」

「お前さんの娘の名前を聞いてなかったな」

ふっと顔をほころばせた。ようやく、人間らしい会話ができた、というような、自然な笑みだった。

「ゾーヤ・キリーロヴナ・ラズーモワ。母親からは『ヒビキ』と呼ばれていましたが」

1986年3月18日 日本海 ソ連領海ウラジオストク閉鎖行政区域 カラムジン島南方海上

膨張式ゴムボートは、日本海の冷たい海水をかき分けて静かに進んでいた。シドニーでキリールと話してから三日が経っていた。空路でシドニーから福岡まで移動。佐世保沖でアメリカ海軍原子力潜水艦（アーチャー・フィッシュ）に移乗して、乾いているが狭苦しい甲板上のドライデック・シエルターに揺られること三日。常夏のシドニーから氷点下のウラジオストク沖にはるばるやってきて、体が慣れる暇もなかった。ウールの防寒帽に新型のゴアテックスパーカを着こんでいても、寒気が繊維の隙間から入り込んできて体の芯を冷やしていくように感じられた。

暗視装置越しに見ると、流水のかけらが星明かりを反射して白く輝いているように見えた。海の中の方が暖かいかもしれない、とジェイクは思った。あるいはギブズ一人ならドライスーツを着こんで水路潜入するか、上空から高高度降下・高高度開傘で乗りつけ、涼しい顔で要塞を制圧したかも知れない。頭の中で（コマンドー）のシュワルツエネッガーの顔をギブズに置き換えると、自然と笑みが浮かんでいた。

「余裕があるのいいが、航法は間違えるなよ」

同じく暗視装置を付けたまま、最低出力に落とした船外機の舵を取っていたギブズが小声でつぶやいた。

「うっかりソ連太平洋艦隊のど真ん中に乗りつけるのはごめんだからな」

「このままで大丈夫です」

GPS受信機とレンザティックコンパスを交互に見ながら、ジェイクは答えた。周囲に船の明かりも航空機の飛ぶ音もない。平穏な航海だった。

「あれか？」

「はい」

やがて正面方向、緑一色の視界に島影とそのシルエットに半ば隠れた要塞の輪郭が浮かび上がる。無言のまま双眼鏡で行く先を見つめていたキリールが、言葉少なに肯ずる。

「舵を代わってくれ」

ジェイクに舵を預けると、ギブズは膨らんだゴムの船べりに身を伏せるようにして前方を警戒した。無人の島から少し離れて建てられたイエブゲニー要塞は、航空写真ではソラマメに似たつぶれた楕円形をしていたはずだが、水面から見上げると四方に尖塔のついた古めかしいヨーロッパの城砦をミニチュアサイズにして、海に浮かべたように見えた。

「エンジンを切れ」

小さなクレーンの付いた突堤が裸眼でも見えるくらいに近づくくと、ボートはエンジンを切って惰性で進んでいった。城砦の周囲に人影はなかった。

「このまま接岸する」

突堤にも城砦にも明かりは付いておらず、人影もなかった。ギブズはサブマシンガンを手にしたまま身軽に突堤へと飛び移ると、ロープを引っ張ってボートをクレーンの影になる位置に引いていった。

「よし、降りろ。このままここに係留する」

ボートから降りたジェイクにロープを渡すと、サブマシンガンを抱え込むように肩付けして突堤から城砦への経路を警戒していた。ロープを渡されたジェイクも同じ消音仕様のMP5をスリングでぶら下げていたが、まるで氷の塊でも抱いているように冷たく、重く感じられた。

「……変ですね」

「ああ」

最後にキリールが降りてきて、二人の背後に続いた。銃は持っていなかった。

「人の気配がない。本当にここか？」

「いるとしたら、ここだと思えますが」

「……確かめてみるしかないな」

暗視装置を顔の前に戻すと、ギブズは突堤を城砦の方に歩きだした。

ギブズが先導し、キリールが続いた。ジェイクは最後尾を警戒していた。潮と湿気で浸食されたコンクリートはぬるぬると滑り、冷え切っていた。カビとサビと、へドロの匂いが磯臭い風に交じっていた。突堤から城壁に囲まれた中庭に入る手前で、ギブズが手信号で停止を告げた。

「どうし……」

何があったのかたずねようとするジェイクの口を塞いで、ギブズは指で中庭の中央に倒れている人影を指し示す。ソ連海軍の制服を着ていて、AK74を肩に吊ったまま倒れていた。手足が壊れた人形のようにねじ曲がり、離れていても死んでいるのが分かった。手信号でキリールに次の行き先をたずねると、キリールは上に向かう階段を指し示した。

一人通るのがやっとの狭い階段は鉄の塗装が剥げ、錆が浮いていた。ジェイクが踏む度に軋んで音を立て、煉瓦の壁に反響した。踊り場で次の死体を見付けて、ギブズが足を止めた。白衣を着てロシア語のネームプレートをつけていた。女が手に持っていたクリップボードを指さすと、ギブズは上階の方を警戒していた。

移送命令書と標記された書類には、被験体（B・2）を研究所から移動させるため準備せよ、と記されていた。移動

の日は今日になっていた。移送命令の発出者の名前が、書類の隅に印字されていた。ギブズに見せようと、肩を叩いた瞬間、鉄枠のはめられた窓ガラスがビリビリと震えた。

「頭を下げる！」

ギブズが暗視装置を投げ捨てる。ジェイクの方は間に合わなかった。窓から差し込むサーチライトの閃光が暗視装置をオーバーフローさせ、緑色の閃光が目を焼いた。手探りで這うというよりも転がりおちるように階段に身を伏せると、間髪頭上の窓ガラスが碎けて降り注いだ。

「こっちへ！」

キリールが手を引いて、ジェイクを通路のアルコーブへと押し込んだ。窓から撃ちこまれる機銃弾がレンガ壁をえぐり、破片が飛び散った。

「怪我はないな？」

「はい……けど視力が……」

「一次的なものだ。すぐに戻る。キリールに銃を渡してやれ」

ジェイクは一瞬逡巡したが、スリングを外して銃をキリールに渡した。

「離脱する。キリール、すまんがこいつの手を引いてやれ」

「けど、中佐……」

書類に書かれていた名前。ジェイクが伝えようとする前に、キリールはその手を引いてギブズに続いた。階段を降りて、中庭に出たところでギブズが足を止めた。

「あいつです」

「ああ、わかってる」

ギブズは手をかざしながら、まばゆいサーチライトの光の中にその姿を見た。

「……ここにいる」

中庭に降りてくるヘリコプターを背に、ミハエリスが立っていた。

「よい夜だね、ウィラード・ウィラーデイチ」

傍らに小さな、子供のような人影を従えていた。黒い外套に毛皮帽、海軍将校の制服に身を固めたミハエリスは、和やかに笑いながら傍らに立つ少女の手を取った。

「紹介しよう」

「ゾーヤ！」

キリールが進み出て、少女の名前を呼んだ。まだ目が痛んだが、ジェイクにもその姿が見えた。色素の薄い髪。父親

と同じ青い目に、小麦色の肌の少女。

「キリール・シードロヴィチ」

興覚めしたとでもいうように、ミハエリスは首を左右に振った。

「まだ理解していないようだな」

「約束が違うぞ！」

「……改めて紹介しよう」

ミハエリスは少女の傍らに跪き、ジェイクたちの方に向けて手を差し出させた。

「〈В е р н ы й〉だ」

「違う！ その子はそんな名前じゃない！ 僕の娘だ！」

「撃てるのかね？ キリール・シードロヴィチ」

MP5の銃口を向けるキリールに、ミハエリスは微笑みかけた。

「……約束したはずだ。彼らを連れて来れば、ゾーヤを返してくれると」

「残念ながら君に計画の全容を話していたわけではなかったということだ」

くぐもった銃声が響き、少女は体をのけぞらせた。ギブズの銃から煙が上がっていた。

「中佐！」

「アレはもう人間じゃない」

眉間を撃ち抜かれた筈の少女はわずかに眉をひそめただけで、あとは無言のまま何もなかったかのように立っていた。

「やめてください……ギブズ……」

キリールが振り向き、ギブズのこめかみに銃口を向けた。手が震えていた。

「あれは……ぼくの……」

「メキシカン・スタンドオフというんだったかな？ ギブズ」

銃口を突き付けあう二人を愉快そうに眺めながらミハエリスは懐から煙草のバックを取り出して一本啜え、火をつけようとライターを取り出したところで手を止めた。

「君たちには感謝しているよ。私の計画にはこの子が必要だった」

「……例の潜水艦に乗せる気だな」

「そう。船体だけでは艦娘としては不完全だった。我々の研究はそこまで達しなかった。完全な艦娘として自律航行させるには、核となる媒体メディアが必要だ。人間と亡霊とをつなぐ……ね」

「何が目的だ？ 第三次世界大戦を起こす気か？」

「もうすでに始まっているのだよ。アメリカもソ連も認めようとはしないが」

火のついていない煙草を口の端で揺らしながら、ミハエリスは答えた。

「人類とそうではないものとの戦争だ。言ってみれば戦争そのものと戦いだ。そして我々は人類の敵となる」

狂っているようには見えなかった。淡々とミハエリスは言い、少女の頭に手を置いた。

「ギブズ……」

苦悩と、悔悟と、罪悪感に顔を歪ませながら、キリールは銃を置いた。

「すみませんでした。あなたを騙す気はなかった」

「気にするな」

「ほう？」

ローターがバタバタと生臭い風を吹き下ろす中、キリールは徒手空拳のままミハエリス……いや、娘の方へと歩き出した。ミハエリスはその様を興味深そうに見守っていた。

「……ゾーヤ」

少女は無言のまま、じっと正面を見ていた。

「わかるか？ パパだよ。一人にしてすまなかった」

一步、また一步とキリールは娘の元へと歩み寄る。傍らのミハエリスは、それを制するでもなく笑って眺めていた。

「家に帰ろう。ママのところへ——」

あと一步。キリールが手を伸ばす。それまで無言だった少女の唇がわずかに動き、舌に言葉を載せた。

「O T T O R I A」

キリールは、肩を抑えてその場にうずくまった。

「キリール！」

倒れたキリールに駆けよる二人を横目に、ミハエリスは少女を伴ってヘリのタラップを昇って行った。

「キリール、くそッ……」

ダウンウオツシュを地上に浴びせかけながら、ヘリは上昇し、南の方角へと飛び去った。倒れたキリールの肩は骨が露出するまで肉が吹き飛び、血管から血が間欠的に噴き出していた。

「僕の話は……いい……いい……」

唇が青ざめていた。苦しそうにうめきながら、それでも娘のことを気遣っていた。

「あの子を……あの子のことを……頼み——」

「わかった。それ以上喋るな」

止血包帯を救急キットから取り出すと傷口に当てがい、ジェイクの手を取って押さえつけさせた。白い包帯が夜闇のなかであつという間にどす黒く染まっっていくのが見えた。

「ジェイク、キリールを頼む。縛っても押さえつけても何でもいい。血を止めろ」

ジェイクをキリールの傍らに残すと、ギブズは銃を手にへりを追って突堤の方に向かった。

「……？」

へりコプターが飛んでいった方角。海面に、何かを姿を現わしていた。まず丸っこい先端が水面に突き出し……やがて、波を蹴立てて、黒い巨体が姿を現した。水中排水量四万トンを超える戦艦並みの巨体。人間が建造した、史上最大の潜水艦。余りの大きさに、距離感が狂った。黒い船体が光を吸収して、そこだけ星明かりが切り取られたように見えた。

「……ッ……」

〈ジカープリスト〉が海面を割いた波が遅れて突堤を洗い、係留していたボートが木の葉のように揺れた。足元をすくう波を踏ん張ってこらえながら、ギブズはただただへりコプターが〈ジカープリスト〉の傍らに着水し、そして黒い船体がまた海の中へ姿を消していくのを見守ることしか出来なかった。

「……中佐」

放棄され、海面で揺れるヘリコプターだけを残して、海は再び静まり返っていた。膝まで濡れて突堤に跪くギブズの肩を、ジェイクが叩いた。

「キリールは？」

ジェイクは無言で首を振った。

「……帰ろう」

遅ればせながら、眠りを破られたウラジオストック軍港の方角がにわかに騒がしくなるのが遠く聞こえた。

1986年3月21日　ハワイ州オアフ島　ハワイ海軍地域　海軍東太平洋通信基幹局ワヒアワ兵舎

「……はい、はい……了解しています、しかし……」

CIAが海軍から間借りしている会議室の一角に陣取って、ギブズは窓の外を眺めていた。サイパン、タラワ、サボ、サマール、ブング……太平洋戦線の激戦地の名前が付いた路地が張り巡らされた向こう、小高い丘の上でNSAと海軍のアンテナ群が天をむき、暖かなハワイの日差しを浴びていた。窓から差し込む陽気が眠気をさそい、ギブズはんと声を出して伸びをした。アフガン、シドニー、ウラジオストク、そしてハワイ。寒いところを暖かいところを行ったり来たりして、体が季節感を失っていた。

俺も年を取ったものだ、自嘲気味に苦笑していると、衛星回線で誰かと話していたジェイクが受話器を置いた。

「校長先生にこつてり絞られたか」

「笑い事ではないですよ」

口をとがらせながら、ジェイクはギブズの向かいに座り、眼鏡をはずして頭を抱えた。頭が重いのは、地中海で亡く

した後新調した軍支給品の眼鏡がまだ馴染んでいないからだけではい

「誰だったんだ？」

「長官直々です」

「出世したものだな」

今のCIA長官は誰だったっけか……海軍出身のターナー提督が退いて、ケーシーとか言う弁護士上がりでOSS時代の古強者がレーガン政権とともに入ってきたはずだ。ソ連への敵意むき出しの冷戦の闘士タイプ。世界で起きていることはすべてソ連が意図を引いていると考えている。ターナー提督ならまだ話がつけやすかったんだがな、とギブズは呟いたが、ジェイクの耳には入っていなかった。

「ミハエリスは（ジカーブリスト）を手土産に亡命すると、外交ルートを通じて公式に宣言しました。技術部門のソビエト海軍担当は今から小躍りしてますよ」

「ソ連側の反応は？」

「アメリカがミハエリスをそそのかして潜水艦を奪ったと言っています。返還しなければ外交問題では済まない」と

「……俺たちがやったことになっているんだらうな」

それもミハエリスの計画の一部だろう。そのためにわざわざギブズをコラムジン島の研究施設に誘い出した。現場に

はアメリカ製の葉莖と、ソ連兵の死体が残っている。そして潜水艦と少女が消えた。

「殺人、窃盗、少女誘拐。お次はなんだ」

「……モスクワ放送では、CIAに誘拐された『女の子の家族』が涙を流して悲嘆にくれる映像を流していたそうですよ」

口に出してから、ジェイクは後悔した。ギブズは何も言わず、窓の外の緑と青のコントラストを眺めていた。

「すみません」

「キリールの遺体を持ってこれたのはお前のおかげだ。よくやったよ」

ジェイクとギブズがボートに乗せたキリールの亡骸は、今は真珠湾基地の一角にある海軍犯罪捜査部^{N C I S}の遺体安置所で眠っている。足の指にイワン・ドウと名前を付けただけで。いつか埋葬してやれる日が来るだろうか。

「それで？」

「引きさがるつもりですか？」

「そいつはこっちの質問だ。戦争マニアのランボー野郎の口車に乗って独断専行し、貴重なKGBからの転向者を失った拳句に外交問題を引き起こした。CIAに残る気なら潮時じゃないのか」

「花束をもってミハエリスの歓迎委員会に加われ、と？」

「ロシア人には塩とパンらしいぞ」

「信じませんよ」

ジェイクは顔を上げると、テーブルに乗せていたファイルフォルダーを広げた。

「我々をウラジオストツクまで運んだ〈アーチャー・フィッシュ〉が微弱な音紋を採取しました」

「音が取れたのか？」

「はい。艦隊海洋情報監視センター¹の分析結果です」

日本近海に張り巡らされた海底バツシブ・ソナー網。その受信波形をデジタル処理した、ギブズには理解できないグラフを広げながら、ジェイクは赤丸で囲まれた部分を示した。

「スクリー音もアクティブ・ソナーへの反響も、航走中の雑音すらありません。センサーで見える限り存在しないも同然です。しかし原子炉の動作音は艦娘としての駆動システムとは別に発振されているようです……通常の原子力潜水艦に比べれば極めて微弱ですが」

「ということは、原子炉の排熱も検知できるわけだな」

「理論的には。よほどの精度が必要でしょうが」

「ふむ……ん」

会議室のドアがノックされた。返答を待たずに誰かが部屋のロックを開け、室内に入ってきた。あっさりしたビジネス・スーツにブラウスの胸元を開け、太い黒縁のウェリントン眼鏡を掛けたその女性は、室内に入るとジェイクとギブズを交互に眺め、肩をすくめた。

「失礼するわ」

「フォスター博士？」

ジェイクは部屋に入ってきた人物に気づくと、あわただしく腰を上げた。ギブズは一瞥しただけで、あとは意図的に無視するように目を背けていた。

「久しぶりね、ジェイク」

「いえ、ええ……どうしてこちらに？」

「上の方からのお達しよ。あなたたちがなにを企んでいるのか評価して報告しろって」

「……下の方、だろう。ホワイトハウスの地下にいる。お目付け役か？」

「専門家としてのコンサルティングと言ってほしいわ」

ギブズは珍しく、不機嫌も露わにフォスター博士から視線を背けて腕を首の後ろで組んでいた。授業態度を叱られた小学生のようにも見えた。

「中佐、こちらは……」

「エイミー・フォスター……博士、か。紹介は不要だ」

「ご存じなんですか？」

「別れた女房だ」

「ぶっ！」

ギブズとフォスター博士の間に漂う緊張感になにか異常なものを感じて、口が渴いた。ジェイクはコーヒーを一口飲もうとしてむせこみ、茶色い染みが点々と書類の上に広がった。

「首尾よく博士号がとれたんだな、フォスター博士」

「今はランド研究所で仕事をしているわ。エイミーでいいのよ？」

「断る。どこかのバカな亭主から巻き上げた慰謝料でせっかく買った博士号だ、せいぜい活用しないと、博士^{ドク}？」

挑発するように言いながら、ギブズは横目にフォスター博士の方を睨んだ。博士はポケットから煙草のパックを取り出すところだった。

「ここは禁煙だ」

「あら、失礼」

取り出しかけたマルボロのバックをしまおうと、フォスター博士は二人が資料を広げていた机の傍らに立った。悪びれる様子もなかった。

「え、えっと……」

「ジェイクとは大学院で一緒だったの、優秀だったわ」

ジェイクが戸惑っていると、フォスター博士の方から話を切り出した。ポケットに手をつ込んだまま、どこかとがめだてするようにギブズを見下ろしていた。

「CIAで仕事をするのはまだいい。それでも、アフガンの荒野やらウラジオストクやら、死に場所も明らかにできないような現場工作であたら命を散らしていい人材ではないのよ。彼の名前がラングレーの石碑に刻まれるところを見たいの？」

「死ぬのは俺の担当か」

「あなたは好きで戦場に行ってる。殺したり殺されたりする緊張感を求めて」

「そうだ。俺みたいなごろつきが銃を握ってるおかげでこの国の人間は夜ぐっすり眠れるんだ。赤ん坊から大統領までな」

「思えば上りよ」

フォスター博士は冷たく言い放った。

「戦争はスポーツではないわ。あなたは緊張感に依存してるだけ」

「野蛮だからやめましようってか、ドク？ 精神分析医を呼んだ覚えはないぞ、ガットマン。寝椅子はどこだ？」

ギブズが感情的に声を荒げるのを、ジェイクは初めて聞いたような気がした。

「君はアル中を診る医者みたいなことを言うな、いつも。その通りだ。俺は戦争なしでは生きられない。だがそういう君はどうだ？ ご立派だよ、先生。自分では一滴も飲んだことがないくせに、寒さに震えながら酒しか体を温めるものがないホームレスに酒をやめろと言っただけで仕事をしたつもりでいる医者と一緒にだ」

「何もあなたが現場に出る必要はないのよ」

「それで？ ただ衛星で相手の姿を見て、ミサイルのボタンを押せばいいのか？ 問題はそこだ。君にとって暴力は現実ではない。数式に過ぎない。だから君みたいな連中にはボタンを押した方が得か損か、ゲームができる。くそが」

「……ウィラード」

「憎んでもいない相手を殺し、愛してもいない女を抱く。単にそれが可能だからだ。臆病な狂人どもがボタンに手をかけ、何もかもをファックしようとしている世界でどうして正気のふりが出来るんだ？」

「ウィラード、やめて」

ただ静かに、フォスター博士はその名前を呼んだ。

「俺をウイロードと呼ぶな」

「わかったわ、中佐。仕事の話をしましょう」

「ああ。すまない……ジエイク。続けよう」

ギブズがジエイクに目くばせする。かすかに疲労の色が滲んでいた。同じくジエイクに視線を送るフォスター博士の方は、共犯者めいた笑みを浮かべていた。

「あなたたちのくだらない〈K〉コレクションについては心配ないわ。国防総省からセキュリティ・クリアランスの承認は受けています」

「信じていないくせにな」

「軍艦の魂を宿した女の子が海の上を歩き、世界中で船を沈めて回ってるって話？信じるのと論じるのは別よ。『閣下、私はそのような仮説を必要としなかったのです』ってところね」

「十五年前には第七艦隊の主力が攻撃を受けた。世界中で今も原因不明の船舶遭難が相次ぎ、ロイズは保険料の値上げを検討している。その数は増え続けている」

「ソ連のテロ。乗組員のサボタージュ。技術的な故障。気象による遭難。説明はつくわ」

「ソ連側船舶も攻撃を受けていることは知っているはずだが」

「偽装でしょう。あるいは、こちら側も同じことをやり返しているか」

「君こそオツカムの剃刀を無視している気がするな。まあいい……現実的な脅威の話をしよう。核弾頭を積んだ原子力潜水艦が、ソ連の指揮を離れてうろろしているのは事実だ。ジェイク」

「はい」

ジェイクは、ギブズとフォスター博士の間に、書類の写しを差し出した。

「カラムジン島で見つけた移送命令書の中に、問題の潜水艦に積み込まれる物資のリストがありました。その中に気になるものがあったので、控えたシリアルナンバーを照合しました。NSAの傍受情報シグネットに、ヒットがありました」

「相変わらずの記憶力ね」

「はい」

ジェイクはばらばらとめくっただけの移送命令書を、一言一句記憶していた。感嘆するフォスター博士に、ジェイクは謙遜するでもなく、自慢するでもなく頷いた。ただただ空が青い、というような事実に同意するような気のなさだった。

「戦場に出なければわからないこともある」

むしろギブズの方がどこか得意そうにしていた。

「こいつは使えるよ、それなりにな」

「やめてくださいよ」

フォスター博士相手に激高したり、かと思うと珍しくジェイクのことを褒めたり。今日のギブズは様子がおかしい。こっちまで調子が狂いそうだ。

「中型機械製作省……核兵器関連部門ね。所轄の研究所から資材の盗難……」

「ソ連の労働倫理を考えれば、途中で横流ししたと考えるのが自然かもしれませんが、問題は中身です」

「鉛210にベリリウム？」

「鉛210は崩壊系列でポロニウムに変化します。ポロニウムはアルファ線源です」

「アルファ線源とベリリウム……中性子源ね」

「そうだ」

一同に重たい沈黙がよぎった。

「核分裂爆弾の起爆装置だ。これで少なくとも、ミハエリスが穏当に潜水艦を引き渡して亡命するというシナリオには疑義が出る。ミハエリスの出身は海軍スベツナズだ。冷戦がホットになった時の海軍スベツナズの任務はなんだ？」

「……NATOの保有する戦術核戦力の無力化」

フォスター博士は洪々といったふうに頷いた。

「つまり奴は西側の核兵器について知識がある、と推測できる。これは先の仮説を強化する」

「しかし、何のために？」

ジェイクが積み上げた情報はそこまでだった。ミハエリスが核爆弾を起爆させようとしているのまでは分かった。しかし、何のために？ 何を爆発させようとしているのか？

「搭載している核ミサイルを自爆させようとしているのかしら？」

「搭載兵器を起爆させるなら、問題になるのは行動許諾^Pリンク^A、ないしソ連の類似システム^Lだろう。核弾頭の起爆装置そのものは生きているはずだ。新しく起爆装置を必要とするとしたら、既に中の中性子源が崩壊して尽きているような古い……」

椅子に背をもたれて考え込んでいたギブズは、はたと何かに思い当って体を起こした。

「海図はあるか？」

「はい」

「ミハエリスの指定した会合地点は？」

「ここです」

ジェイクが指し示した、台湾海峡、バシー島沖の一点にギブズは赤鉛筆でバツ印を付けた。

「フィリピンのスービック基地から迎える艦隊が出発しています。おそらくカムラン湾からソ連艦隊も出動しているはずですよ」

「サン・ホアキン郡だ」

「はい？」

「輸送艦^{LST}〈サン・ホアキン・カウンティ〉。ここに沈んでいる」

「そのフネに何が？」

「核弾頭だよ。ここにある」

「話が見えませんが……」

ジェイクの無知を咎めるように横目で睨みながら、ギブズは続けた。

「1950年代だ。アメリカ海軍は岩国の海兵隊航空部隊が有事に使うための核爆弾を日本に備蓄していた。それを積んでいたのがサン・ホアキン・カウンティだ」

「ちょっと待ってください。日本本土への核配備は米ソとも南北協定で禁止されていたはずじゃないですか」

「ちょっと見直したかと思ったらすぐこれだ」呆れたように肩をすくめて、ため息をついた。「CIAじゃサンタクロースが実在すると教えてるのか？ 齒の妖精はどうだ？」

「当てこすりはやめてください」

「沿岸から数フィート離れて浮かんでいるから、たとえ領海内でも南日本の領土外だというのが海軍と海兵隊の理屈だ。軍人はそういう考え方をする。一度手に入れたおもちゃは手放そうとしない。ママに内緒にしてもな。だが」

ギブズの指が海図の上を、瀬戸内海から台湾海峡までなぞった。

「1960年代のはじめごろだ。当時もお前みたいな跳ねっかえりが国務省だかCIAだかにいたらしい。大統領にすら内緒にしていた備蓄計画をホワイトハウスにチクろうとして、それを察した海軍は問題になる前にサン・ホアキン・カウンティをフィリピンに引き揚げさせた。そして……」

とんとん、と指が赤いバツ印の上を叩いた。

「サン・ホアキン・カウンティはここで沈んだ。数十発の核弾頭とともにな。海軍はただ電子機器修理船が沈んだとして処理し、一緒に沈んだPAL実装以前の核兵器については口をつぐんだ。名前の書いてないトラペラーズチェックと一緒に。持っていれば誰でも使える」

ギブズは海図から指を離すと、フォスター博士の方に振り向いた。

「ミハエリスは核弾頭起爆装置を持っていて、古い核爆弾が大量に沈んでいる海域に向かおうとしている。これは君が却下した仮説を必要としない、蓋然性の高い脅威だ。同意するか？」

「同意します」

フォスター博士がうなずくと、ギブズは壁の時計を見上げた。

「ミハエリスが指定した会合時間まで余裕がない。行くぞ」

「行くなってどこですか？」

「歓迎委員会だ」

「待って」

ジェイクが広げた書類を慌てて片付けていると、フォスター博士が鋭い声でいった。

「あなた達が行く必要はないわ。連絡して艦隊を引き上げさせればいい」

「それは君の仕事だ。書類をまとめてラングレーに評価報告を上げろ。その間俺たちは俺たちの仕事をする」

既に部屋を出ようとしていたギブズはドアから顔だけ覗かせて、挑発的に笑った。

「男の仕事だ」

五分後に、真珠湾海軍基地から迎えのヘリが着陸するはずだった。書類の詰まったズック鞆を抱えてジェイクが芝生の上を小走りで移動していると、木陰のベンチでフォスター博士が座っているのが見えた。

「行くのね」

「はい」

くゆらしていたマルポロを口から離すと、フォスター博士は深く煙を吐き出した。

「中佐があんなに感情を露わにするのは、初めて見ました」

出発時間が迫っていたが、このまま何も言わずに去るのは心残りのような気がして、足を止めた。

「……やはり特別な存在なんでしょうか。中佐にとってあなたは」

「違うわ」

口紅のついた吸殻を灰皿に押し当てると、フォスター博士は静かに否定した。

「何を見て、何を考えているか、彼は誰とも分かち合おうとしない。彼自身が理解していればそれでいい。ベトナム時代は家にいたのは数日だけ。いたとしても何も話さない。まるで得体のしれない東洋人の哲学者と寝てるみたいだった」

「わかります。少しだけです」

タフな言動と、思索的だがその思考を他者に分かち合おうとしない孤高さ。殺人をもちとわなない粗暴さと同居する、深く静かな洞察力。制御された野獣。あるいは戦場に美と真実を見出した武人サムライのような態度。ジェイクがギブズに抱いていた印象もまた、言語化してみればどこか博士の見方と通底していた気がした。

「そう?」

フォスター博士は少し目元を和らげて、ジェイクの方を見た。

「今日一日で、結婚していた間よりもずっとたくさん彼の声を聞いた気がする。彼も変わったのかもね」

佯びしそうな笑みだった。

「けど、変わっていない部分もある。彼が自分でいられるのは戦場だけ。彼が気を許せるのは戦争だけ。一度、ウィラードが海軍内部で女の子を追っかけまわしてると噂を聞いて笑っちゃったわ」

フォスター博士はからからと乾いた笑いを立てたが、笑みは目元まで届かなかった。

「彼は戦争と寝たのよ。それはきつと女の顔をしていたんだわ。可愛い、とびっきり可愛い女の子の顔をね」

「博士……」

「ジェイク」

基地から飛来したU・H・1がバタバタと、灯油の燃える匂いを吹きおろしながら二人の頭上を飛び越えていった。そ

のローター音にかき消されそうになりながら、フォスター博士はぼつりとつぶやいた。

「頼むわね、ワイラードのこと」

聞こえても聞こえなくても構わない、そんな声だった。

1986年3月25日 台湾海峡バシー島沖南方洋上 アメリカ海軍水上任務部隊旗艦 強襲揚陸艦〈サツマ〉

「艦長」

通信兵からテレタイプされた通信文を受け取ると、任務部隊指揮官を兼任する艦長、ラヴェル大佐は艦橋から甲板に居並ぶハリアー戦闘機を一渡り眺め、航空幕僚に着艦ラインを空けさせるよう指示した。十分後、フィリピンのクラークフィールド基地から飛来した海兵隊のOV10が〈サツマ〉の飛行甲板に着陸した。

「ウィラード・ギブズ中佐です。こちらはCIAのジェイコブ・ガットマン」

ベトナム時代から酷使されてきた年代物の海兵隊機が着艦して間もなく、フライトスーツ姿の二人の男が水兵に伴われて艦橋に姿を現わした。

「艦長のラヴェルだ。君たちが来ることは聞いている。CDCに行こう」

タラワ級強襲揚陸艦の中でも最終型の〈サツマ〉の指揮所は、揚陸指揮・航空機運用機能が強化され、空母に準ずる形でCICではなくCDCと呼ばれていた。緑色の情報処理コンソールがぼんやりと幻影のように浮かび上がる薄暗

い室内に二人を招き入れると、ラヴェル大佐は副長に敬礼を返し、海図台の傍らに立った。

「我々の現在位置はここ。CIAから連絡を受けた会合予定地点はここだ。本艦から二〇マイル」

アクリルのクリアボードに書き込まれた任務部隊各艦、友軍航空部隊のアイコンを示しながら、大佐は説明した。

「A D D A E M O N ?」

「問題の潜水艦のコードネームだ。海軍のコンピュータが適当に付けた」

A D D A E M O N と グリー ス ペ ン で 書 き 込 ま れ た 敵 味 方 不 明 潜 水 艦 の ア イ コ ン か ら 二 〇 カ イ リ 。 水 上 任 務 部 隊 は 〈 サ ツ マ 〉 を 中 心 と し て フ リ ゲ ー ト 、 駆 逐 艦 か ら な る 緩 や か な 輪 形 陣 を 描 き 、 後 方 に は 救 難 艦 と 補 給 艦 を 伴 っ て い た 。

任務部隊の前方に書き込まれた友軍機は地上基地から出撃した対潜哨戒機部隊だろう。

「厄介なことに、ソ連艦隊も接近している。カムラン湾からだけじゃない。ウラジオストクから南下した部隊も合流している」

予定会合地点を挟んでちょうど等距離、敵味方不明の水上目標のアイコンが複数記されていた。大佐はP・3Cから電送されてきたと思しき不鮮明な写真を示した。飛行甲板にフォージャーを満載したキエフ級。太平洋艦隊の（ヘミンスク）だろう。ソヴレヌイ級防空駆逐艦、その他の護衛艦艇を伴っていた。おそらく原子力潜水艦もいるはずだ。

「……もっと厄介なことがあります、大佐」

「A D D A E M O N の亡命は偽装である可能性があります。本当の目的は我々への核攻撃を企図であると推測します」
「それはどのくらいの確度かね？」

少なくとも、外からは驚いた素振りは見えなかった。大佐はボードを睨みながら、顎に手を当ててなにか考え込んでいた。

「艦長」

通信士官の呼び声で、艦長の沈黙考は破られた。

「ソ連艦隊から入電です。音声回線です」

「つなげ」

スピーカーから、訛りの強い英語が流れてきた。ノイズがひどいせいもあって、「こちらはソビエト連邦太平洋艦隊」までしか聞き取れなかった。

「艦長。ロシア語で話せ、と言ってやってください。この男はロシア語ができる」

ギブズが進言すると、大佐は無言でうなずき、ヘッドセットをジェイクに渡した。ジェイクがロシア語で何事か言うのと、スピーカー越しに返ってくる音声もロシア語に変わった。

「ソ連太平洋艦隊司令官名で、こちらに撤退するよう要求しています。問題の潜水艦を撃沈する許可は受けている、妨

害は排除する、とのことですよ」

「そうか」

「何か回答しますか？」

「無視して構わない。通訳ありがとう」

大佐は静かに言うと、ギブズの方を見た。

「状況は錯綜しているようだな。マジモン^Tの厄介^Aごとだ^R」

「これから理解^Fも収拾^Uも不能^Bな厄介^Aごと^Rになりますよ」

ギブズと交わした軍隊スラングに秘密を共有するもの特有の笑みを返すと、大佐は真顔を作った。

「ソ連が偽装亡命を利用して我々に核攻撃をしようとしているということか？」

「クレムリンの意図ではないと思います。これはADDAEMONを乗っ取っている人物……ミハエリス、と呼ばれ

ている男の独断だと思われます」

「もっと単純な時代に生まれたかったよ」

艦長は天を仰いだ。天井には張り巡らされた配管と通気ダクトしか見えなかったが、その向こうにいる誰かに愚痴をこぼしているようにも見えた。

「副長」

「はい」

「任務部隊各艦に通達。NBC防御の準備をさせろ。本艦のNBC防御はきみが指揮を取れ」

「任務部隊各艦にNBC防御を通達、これより副長は本艦のNBC防御部署を発令します。アイ」

副長が命令を復唱して走っていくと、大佐は館内通話で艦橋にいる航空幕僚を呼び出した。

「発艦可能なハリヤーはすべて爆装させて発艦させろ。一〇分以内に発艦不可能なものは格納庫に収容。格納庫の対核汚染防御については副長の指揮に従え」

マイクから顔を離すと、大佐はギブズの方を見た。

「現時点で君たちにしてあげられることはここまでだ。わざわざ来てもらったのにすまないな」

「いえ。……よく訓練された部下をお持ちですな、大佐」

「備えよ常に、だ。リスクとは生起確率と損害の積だ。リスクがある以上は備えねばならん」

部下を褒められて悪い気はしならしく、目元は冷徹に戦況図を睨んでいたがほおが緩んでいた。

「推定会合地点にリーダー、感あり」

リーダーの声とともに、対水上リーダーの反応を示す光点が情報スクリーンに浮かび上がった。

「スピアー1が付近に先行しています。そろそろ視程に入るはずですよ」

「つなげ」

P・3Cの指揮を執る戦術士官が音声通話に出た。

〈こちらのリーダーでもとらえていますよ、ビジュアルコンタクト・ネガティブ〉

ジェイクたちは暗いCDCに目が慣れていたが、海上はそろそろ陽が沈みかけている頃だ。人間の目が昼の明るさにも夜の闇にも対応できず、いちばん視力が鈍る時間帯だ。機体から突き出したバブルウィンドウから、観測手は目を皿のようにして海面を眺めていることだろう。

「ソノブイは？」

〈アルファ級が壊れたボイラーみたいなやかましい音を立てていて他は何も聞こえません。磁気も反応なし……いや、なんだこれは……〉

「どうした。事実だけ伝達しろ」

〈赤外面像F L I Rに反応がありますが、おかしい……海面より温度が低い。今見えました……潜水艦じゃない。輸送艦……

旧型の戦車揚陸艦のようです〉

びっ、と音を立てて、情報スクリーンに友軍水上艦艇を示すブリップが点灯した。データリンクを介して送信された

情報には「USSS AN JOAQUIN COUNTY」と表示されていた。

〈……まるで幽霊だ〉

「大佐。哨戒機を退避させてください。そのフネは核弾頭を積んでいる」

「何だと？」

「ジェイク、ソ連側との回線はまだつながっているか？」

「はい」

「ソ連艦隊に警告しろ。核攻撃の危険がある、退避しろとな。構いませんね？」

「ああ……ああ？」

ギブズの剣幕に気圧されるように大佐が頷くや否や、ジェイクはマイクを取ってロシア語で叫んだ。

「ソヴェツコム・フロートウ。イエスチ・リスク・ヤーデルノイ・アターキ。パジャールイスタ・エヴァクイリエテ
シイ」

ジェイクが言い終わった瞬間、回線はブツンという音を立てて静まり返った。CDCの明かりが明滅し、情報スクリーンが緑一色に塗りつぶされる。通信、リーダー、航空管制、兵装、それぞれのコンソールについていた要員が、一斉に蜂の巣をつついたような騒ぎを起こした。

まるまる一分ほど遅れて、サツマの艦体が揺れた。

1986年3月30日　フィリピン海　ルソン島東方沖　合衆国海軍救難艦（サルヴァー）

まだベンキの匂いも新しい士官食堂で、ジェイクはグアムから放送されるAFNの短波ラジオを聞いていた。台湾海峡での核爆発は秘匿のしようもなく、衛星からも近隣を航行する商船から目撃されていた。米ソだけでなく、北京、台北、東京、筑波の近隣各国政府も蜂の巣をショットガンで吹き飛ばしたように騒ぎ出し、お互いを非難し合っていた。アナウンサーが空の棺で営まれたP・3C乗員の葬儀について触れると、ジェイクは目を閉じてソファにもたれた。

米ソ両国の艦隊が西部劇の決闘めいて向かい合う中、アメリカ製の核爆弾が爆発した。人的被害は最小限。ソ連側は死傷者なし。アメリカ側もP・3C一機が跡形も無く蒸発しただけ。それでも、死人を出したことに変わりはない。

「ジェイク？」

ギブズが食堂に入ってきて、ジェイクは視線を上げなかった。この数日、ずっと無人水中艇から送られてくる水中画像とにらめっこしていたはずのギブズの方が活力に満ちているように見えた。スービック基地に空路帰投するや否や正式に就役する前のセーフガード型救難艦を、どうやって横車を押したのか機装員ごと駆り出してきて、フィリピン

海の水底を探らせていた。髭も剃らずシャワーも浴びず、トイレ以外は食事も仮眠も席で済ませ、目だけがらんと輝いていた。

「お前に通信だ。緊急だとさ」

「すみません。使い走りのようなことをさせて」

「気にするな」

何かにとりつかれたようだ、とギブズを見てジェイクは思う。しかしそれは自分も同じだ。核爆発を阻止できなかったあの瞬間……いや、ずっと前から死人に取り付かれているような気がする。物思いにふけりながら、ジェイクはテレタイプ用紙に目を落としたが、通信文を最後まで読むと用紙を放り出して短波ラジオにとりついた。

「今何時ですか」

ギブズが答える前に、ジェイクは壁に掛けられた時計に目をやった。慌ててダイヤルを回すと、短波通信特有のぼんやりしたノイズが、やがてピーという試験放送のような短音のトーンに変わった。

〈こちらは 深海棲艦 第一艦隊旗艦、戦略任務水中巡洋棲鬼「ヴェールヌイ」
アビス、ドゥワエラ

「……ミハエリス……？」

ラジオから流れ出したのは、まぎれもなくミハエリスの声だった。

（かつてソ連海軍水中巡洋艦〈ジカープリスト〉と呼ばれた艦だ。私はパーヴェル・ミハイロヴィチ・ポリイシコ。元ソ連海軍一等海佐、西側にはミハエリスという通称でも知られている。私はソ連参謀本部のスパイだった。しかし現在は人類のいかなる政府、いかなる国家、いかなる民族にも所属していない。我々は人類そのものに敵対を表明する。これは宣戦布告である）

カプールで会った時の愉快そうな抑揚は身を潜め、何度もしハハサルを繰り返したアナウンサーのような淡々とした口調だった。

〈先般の台湾海峡における核爆発は我々深海棲艦が、ソ連の潜水艦とアメリカの核弾頭を利用して企図したものである。その事実からも理解していただけたと思うが、人類はすべての生命のゆりかごである海に対して深刻な罪を犯し続けている。人類は海を戦場とし、血を流し、破壊と殺戮を行うだけでは飽き足らず、鉄くずと重油に加えて核爆弾と原子力兵器で海を汚染している。だから我々深海棲艦が生まれた。その生存を海洋の交通線と資源に依存しているにもかかわらず、人類には海を利用する資格がないのだ。よって、我々は人類から海を取り上げる。〉

我々の活動はこれが初めてではない。1946年以来、我々は商船と軍艦との区別なく、あらゆる海上交通に対する脅威であり続けた。テロ、遭難、事故、各国政府は様々なカバールのもとに押し隠し続けようとしていたが、我々の戦争は続いていたのだ。1971年のアメリカ第七艦隊壊滅は？ スエズ海峡で沈んだアキレ・ラウロは？ これらは一例

に過ぎない。多くの艦船が沈み、そしてその理由を隠蔽されてきた。いつまで隠し通せると思っていたのか？――我々は増え続ける。我々が沈めた船は新たな深海棲艦となって人類の敵に加わる。その等比級数的な流れを押しとどめることはできない」

「……同じ艦娘を除いては」

ミハエリスがラジオの向こうで続ける前に、ギブズがその言葉を先に口にした。

「我々は人類への敵対を明言する。その敵意の証として、アメリカ合衆国に核攻撃を行う。今度はソ連製の核弾頭だ。人的被害は軽微だが、それで確実に理解して頂けることだろう。これは誰もが逃れられない、人類が初めて経験する人類そのものへの戦争なのだ。この宣戦布告は順次各国政府に文書で通達されるので、この放送を聞き逃した方々も安心してほしい」

最後に少しだけ、冗談めかしてミハエリスは告げた。マイクの前であの意地の悪い笑顔を浮かべているのが、ギブズにもジェイクにも想像できるような気がした。

「それでは親愛なる人類諸君。良い一日を」

最後にまたトーン音が続き、そしてノイズだけになった。

「……中佐はこれを予期していたんですか？」

「動機はともかく、意図はだいたい予想の通りだ。まさか短波放送で堂々と声明を出すとは思わなかったが」

「これで、艦娘の存在は機密でも何でもなくなりました」

ジェイクはソファの背もたれに首を預けて、背後に立っているギブズの方を仰ぎ見た。

「……嬉しいんですか？ 自分の正しさが証明されて」

「これで堂々と動けるようになったのは事実だ」

「喜んでるように見えますね」

胸の中に、自分でも予期していなかった怒りが湧いてくるのを感じた。

「人が死んでるんですよ？」

「悲しんだらキリールやスピアー1の乗員が生き返るのか？ 今まで艦娘……いや、深海棲艦の犠牲となった奴ら

も？」

ジェイクが黙っていると、ギブズは柄にもなく悔やんだような表情を見せた。

「すまん。言い過ぎたな。お前さんは……よくやったよ。充分以上の働きをした。ソ連艦隊に警告を発したことで名目も立った。あそこで米ソの衝突が起きてもおかしくなかったんだ」

ギブズがいつになく神妙な顔を見せたせいか、胸の中の苛立ちが引いていくとジェイクの頭に疑問が浮かんだ。唐突

に、ぼつりと呟くように言った。

「……ミハエリスの目的が人類への敵対だったとしたら、なぜあんなタイミングで核を爆発させたんでしょう？」

「ふむ？」

「サン・ホアキン・カウンティに搭載されていたのは戦術核弾頭でした。もっと艦隊を引き付けていれば、犠牲は増えていたはずですよ」

「警告のつもりだった？」

「可能性はあります。しかし……」

なにか引っかかっていた。がソ連の核軍備とその運用思想。ジカーブリスト……いや、ヴェールヌイの搭載兵器。搭載核ミサイルは艦娘である艦そのものから独立している。ミハエリスはキーを搭載していないと言っていた。今までに見聞きしてきたデータに過ぎない断片が脳の中で渦を巻き、やがて情報となつて一つの筋を作った。

「……防衛線」

「ん？　なんだ？」

「デッド・ハンドです。デッド・ハンドですよ、中佐！」

ジェイクはソファの上に身を起こすと、自分の手のひらを眺めながらまくし立てた。

「……自動報復システムか」

「ソ連は領土が核攻撃を受けた場合、クレムリンとの指揮系統が途絶しても自動的に第二撃を行うシステムを持っています。そのサブシステム、もしくは類似したものが戦略原潜に搭載されていたとしたら？ 電磁パルス、衝撃波、電離放射線……核爆発のシグネチャーを検知したら、PALを迂回して核ミサイルが使用可能になるとすれば？」

「核攻撃を受けたことを検知した場合、政治的判断がなくても核ミサイルが使用可能になる。それを狙ってわざわざ核爆発を起こした……筋は通っているな。蓋然性はある」

「だとすれば、ヴェールヌイは近くにいたはずだ」

「だが、対処手段がない。通常兵器では深海棲艦に歯が立たない。核ミサイルシステムが独立しているとすれば、内部に侵入して破壊することは可能かもしれないが、浮上させるか潜水して接近するかする必要がある」

「ああ、もう！」

そこで手詰まりだった。高揚が一気に引いていくと、今度は焦燥感が襲ってきた。ソファの上で転がって頭を抱えるジェイクを、ギブズは痲癩を起した子供を見守る親のような優しさをたたえた目で見下ろしていた。

「……そこまで予期していたんですね？」

「何がだ」

「ミハエリスを止めるためには艦娘が必要になる。中佐がこの海底で探している『古い知り合い』ってそのことなんじゃない？」

「ここまでも俺のツテを頼って何とかやって来たんだ。信用しろ」

ミハエリスやキリールのことを思うとそんな樂觀的な気分にはなれなかったが、一応の礼儀としてジェイクはたずねた。

「で、見つかったんですか？」

「見つからない。影も形もない」

「……それにしても嬉しそうですね」

「影も形もないということは、いるということだ」

中佐の判じ物めいた喋り方には辟易していたが、後から思い返すとだいたい筋は通っている。そう理解できるくらいには中佐と長い時間を過ごしていた。ジェイクが肩をすくめて体を起こすと、無人水中艇操作のため乗り組んでいる民間船員が食堂に駆け込んできた。

「ギブズ中佐、エージェント・ガットマン、デッキまで来てください」

デッキは頭上から押し包んでくるような熱帯の宵闇に覆われ、マストの航行灯と煌々と灯る作業用照明が必死デッキを闇の浸食から防いでいるように見えた。艦尾では停船した（サルヴァー）が揺られるたびに、波間で夜光虫が青白い燐光を放っていた。

「あれです」

右舷方向、五〇ヤードほど離れた海面上を、探照灯が照らし出していた。

「人……？」

ジェイクは双眼鏡を借りて探照灯の照らす方を見た。人間の若い女……いや、少女と言ってもいい。白と赤の柔らかなような装束を身にまとい、目を閉じて胸の上で手を組んでいた。波間に揺蕩う黒っぽい髪と、明るく照らし出された白い肌が何か非現実的な存在のように映し出されていた。まるでたつたいま、生きたまま水葬されたばかりという感じだった。そんな不穏な想像がかきたてられた。

「死体？ いや、だけど……」

「やっと逢えたな」

傍らで同じく双眼鏡をのぞき込んでいたギブズは、不安をにじませたジェイクとは対照的に、どこか嬉しそうに呟くと甲板員にボートを下ろすように命じた。

「中佐？」

「どうした」

ギブズはクレーンがゴムボートを下ろすのを、今や遅しと待ちかねたようにじっと見守っていた。

「あれが……」

「そうだ。俺たち……いや、俺が探していた女だ」

瑞鶴。かつて滅んだ国の、今はない海軍の艦の名前を持った少女。

「やっと隠し場所ドロップにたどり着いた」

「ドロップ？」

「俺たちはそう呼んでいる」

「俺たちって……誰の話をしてるんですか？」

ボートが水面に降ろされると、ギブズは縄梯子に手をかけ、当然のごとくに後に続こうとしたジェイクを手で制した。

「お前はいい。船で待機していろ」

「しかし」

「これは俺の仕事だ」

どこか様子がおかしい。不安に駆られるジェイクをなかなば無理やり押しとどめると、ギブズは一人ボートに乗り組みエンジンをかけた。

「今までありがとう、ジェイコブ」

「え？」

船外機の音に紛れて、よく聞こえなかった。ボートはサルヴァーの舷側を離れて、ほの青く光る航跡を曳きながら探照灯が照らす先、波間に浮かぶ少女の方へと進みだした。残り三〇ヤード……二〇ヤード、一〇ヤード。エンジン停止。ギブズは手際よくボートを操り、白昼のように明るく照らし出された海面に停止させた。

双眼鏡の向こうでギブズが少女の手を取るのが見えた。何か話しかけているように唇が動いた。その瞬間、視界が黒一色に染まった。

双眼鏡を下ろすと、デッキの明かりがすべて消えていた。船底から低く響いていたディーゼル機関の唸りも止み、辺りは静寂と闇に包まれていた。船の電源が落ちたことに気付いた乗組員があわただしく走り回り、静寂を破った。蚊帳の外に置かれたジェイクは一人、再び双眼鏡を手に目が闇に慣れるのを待った。半円形の月と星明かりだけが照らす藍色の海面に、静かに並び立つ少女の姿が暗く浮かび上がった。

「……？」

双眼鏡を下ろして眼鏡をはずし、焦点を合わせ直してもう一度ボートの方を見た。見間違いでではなかった。子供と見まがうような小さな女の子が二人。もう一人、もう少し背の高い少女の姿。少女達は、瑞鶴をボートに引き上げるギブズをジェイクたちから守るように半円陣を描いて、さざめく波の間に立っていた。

「中佐っ！」

届くのだろうか。声の限りにジェイクはギブズを呼んだ。機関が復旧した。エンジンが息を吹き返し、探照灯が再び灯ったとき、そこには無人のボートだけが寄る辺なくぶかぶかと浮いていた。